

『コンシオネス』とジョアシャン・ペリオン

ヨーロッパ近代のレトリック教育の原点

横山 裕人

19世紀フランスの中等教育の教科書について調べていると、*Conciones* というラテン語の題名の本に随所で出会う。しかも、非常に重んじられていたことが当時の学校を舞台にした物語からも感じ取られる。例えば、アンドレ・ロリー（本名パスカル・グルッセ）の小説『パリのコレージュ生活』のなかでは、この本の暗誦にばかり時間を費やしていると抗議した教え子たちに対して、レトリック級教授ペルラン先生が熱弁を揮ってこう反論している。

『コンシオネス』こそ、リーウィウスの、クイントゥス・クルティウスの、サルスティウスの、タキトゥスの、ということはつまりラテン文学の最も純粹な四大歴史家の精髓なんだ。[中略]この要約は、干からびて個性を失った叙述や、事件や事実の概説ではない。それは、ローマ国家の最重要課題をめぐる情熱的で、活気あふれる討論なんだ。偉大なる共和国のコンスルたち、将軍たち、元老院議員たちと一緒に、彼らを突き動かしていた諸問題の核心に君たちは触れる。君たちは、審議の場や、中央広場での裁判や軍隊の頂点に連れて行かれる。彼らを行動させ導いている様々な動機が議論されている中を、彼らの後に付いて進んで行くんだ。君たちは言うなれば彼らの身代わりになっている。すべてが生気を帯び、すべてが蘇る。君たちの眼の前に出現するのは、一つの世紀全体、まるごとの場面なんだ。君たちの想像力と同時に判断力を伸ばし、君たちの古典教育の完成を飾るのにこれほどふさわしい本を他に容易にみつけれられるとでも思っているのかい。『コンシオネス』は簡単には取り替えられないというわけさ。これを生み出すには、古代文学に対する深い知識と傾倒、エティエンヌ家のアンリ2世ほどの教育的な才能がなければならなかったんだ。

¹ André Laurie (pseudo. de Paschal Grousset), *Une année de collège à Paris*, J. Hetzel, « Scènes de la vie de collège dans tous les pays », [1883], pp. 189-190 (Gr. in-8vo illustr. par J. Geoffroy). この作品は、「世界の学校生活」シリーズ中の他の作品と異なって作者自身の学校時代（パリのリセ・シャルルマーニュ）の経験に大いに基づいてい

ペルラン先生による弁護は決して根拠のないものではない。フランス中等教育史研究の第一人者アンドレ・シェルヴェルは、「レトリック級で用いられた *Conciones*こそ、1880年以前の中等教育全体の要石である²」と断言してその重要性を確認している。

しかしここで教育史における重要性の検討はひとまず置いて、*Conciones*の起源がアンリ・エティエンヌ（2世）にあるとされたことに注目したい。実はこのような説は、19世紀のレトリック教師にとって常識で、例えば、1856年にこの本を編集したレトリック教師ジュリヤン・ジラルも序文のなかで同じ説を唱えている³。ところが、他の教材では起源を明確に指摘するシェルヴェルも、「*Conciones*の伝統は、少なくともアンリ・エティエンヌ（1570年）まで遡る⁴」という具合に少々歯切れが悪いのである。

では、そのアンリ・エティエンヌの *Conciones* の実物に当たって見よう。ポンポンヌ・ド・ベリエーヴル *Pomponne de Bellièvre*（1529-1607、当時はフランスの駐スイス大使、後にフランス大法官）宛献辞にこう書いてある。

ティトゥス・リーウィウスのコンシオネスといえ、彼の作品のうち、現代までやっととり着いた巻の全てから、彼の記した演説 *concio* を抜粋し、単体でまとめて刊行した物ですが、この本に、私が極めて高くその見識を（当然ですが）評価していた人士の少なからずが何よりも満足しているのを私は実際に知りました。そこで、私はそのとき、もし、一つの言語の一人の歴史家で余人が

るようである。しかし、物語の中心となるコンクール・ジェネラルは、1880年の中等教育改革で大きく変わり、主人公たちが熱中するラテン語演説は、小説が刊行された時点で姿を消している。Cf. Xavier Noël, *Paschal Grousset : de la Commune de Paris à la Chambre des députés, de Jules Verne à l'olympisme*, Bruxelles, Les Impressions Nouvelles, « Réflexions faites », 2010, pp. 154-155. なお、ロリーの「世界の学校生活」については、マルセル・ブルーストも『楽しみと日々』所収の「ブヴァールとベキュシェの社交趣味と音楽マニア」の中で触れている（Jean Santeuil; précédé de *Les Plaisirs et les jours*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade; 228 », 1971, p. 58）。

² André Chervel, *Les Auteurs français, latins et grecs au programme de l'enseignement secondaire de 1800 à nos jours*, INRP; Publications de la Sorbonne, 1986, p. 370.

³ Julien Girard (éd.), *Conciones latinae sive orationes ex Tito-Livio, Sallustio, Tacito, Q. Curtio collectae...*, Dezobry, [1856], p. V. 編者のジラル（1820-1898）については以下を参照されたい、拙稿「リゼ・コンドルセの教師たち：ブルーストの時代のフランス古典中等教育の一側面（前編）」『成蹊法学』88号、成蹊大学法学会、2018年、307-340頁。後編（同誌89号、成蹊大学法学会、2018年、207-250頁）でも、ラテン語演説廃止に対するジラルを扱った。

⁴ André Chervel, *op. cit.*, p. 370.

果したことを、ギリシア・ラテンの両言語のほとんどすべての歴史家といってもよい多くの歴史家が私が成し遂げるならば、前者を喜んだ人士からも、また他の極めて多くの人々からも大いなる好意を得られるだろうと思いました。この希望に導かれて、数か月前にこの仕事に取り掛かり、今や最後の手を入れたところです。

エティエンヌが自負しているのは、演説を歴史書から抜粋すること自体ではなく、ラテン語・ギリシア語両言語を抜粋対象にしたことである。そして、彼の着想源として、ある本の存在を挙げている。しかし、この、リーウィウスの「演説を抜粋し、単体でまとめて刊行した」本の名前をエティエンヌは明かしていない。

その答えは図書館の目録からすぐにわかるのだが、様々な目録を調べてみると、*Conciones* は、フランスにとどまらず、イタリア、ドイツ、オランダ、イギリス、スペイン、デンマークなど西ヨーロッパ各地で16世紀以降20世紀初頭まで長期間数多く刊行されてきた、「ロング・セラー」であることが浮かび上がってくる（筆者が手に取ったものだけでも50点近くある）。

それにもかかわらず、これまで、本格的な研究の対象になって来なかった。編集著作物という、ともすれば独創性を認められないジャンルの性格からか、あるいは、現在は全く使用されなくなった教科書であるからか、教育史研究でも文学史研究でも、その対象とされてこなかった⁶。それでは、古典学における受容研究では問題にされているのだろうか。パウル・O・クリステラー

⁵ Henri Estienne (ed.), *Conciones sive orationes ex Graecis Latinisque historicis excerptae...*, [Genève], H. Estienne, 1570, f° [astérisque] 2r° (non pag.) : « Quum ego Titi Livii conciones, ex omnibus, qui quidem ad tempora nostra pervenerunt, eius libris excerptas, et seorsum editas, nonnullis etiam viris quorum iudicium maximi (ut par erat) faciebam, summopere placere comperissem : magnam me ab iis aliisque quamplurimis gratiam initurum speravi, si, quod in uno unius linguae historico alii praestitissent, ipse in multis et pene universis qui extant utriusque linguae historicis praestarem. Ea spe ductus huic operi manum primam ante aliquot menses, nuperrime extremam imposui. » 献辞は下記に翻刻されているが、教か所に転写ミスがあるので原書にあたる必要がある。Judit Kecskeméti, Bénédicte Boudou, Hélène Cazes, *La France des humanistes : Henri II Estienne, éditeur et écrivain*, Turnhout, Brepols, « Europa humanistica », 2003, pp. 264-268 (#75). なおラテン語の転写に際しては、元来半母音を示す u は v に変え、略字記号や合字はすべて置き換えたが、*concio* など綴りはそのままにした。

⁶ 教育史にも目配りをしてきたアントワーヌ・コンパニョンの炯眼によってコンシオネスの長い伝統が指摘されている。Antoine Compagnon, « Joseph Reinach et l'éloquence française », in *Commentaire*, n° 120, 2007.4, p. 1042.

らによる中世ルネサンス翻訳・注解受容史の集成 *Catalogus Translationum et Commentariorum* は、第2巻(1971年)でリーウィウスを扱い(第3巻に補遺)、第8巻(2003年)でサルスティウスを扱っているが、*Conciones* に言及している箇所は特に見られない。古代文化の百科事典 *New Pauly* シリーズでも現段階では立項されていない。リーウィウスの受容を扱った個別研究でもあまり事情は変わらない⁷。あるいは、レトリック史研究でも、レトリック分野の大事典 *Historisches Wörterbuch der Rhetorik*⁸でもやはり見出しになっていない。実に、2017年に漸くファン・カルロス・イグレスィアス=ソイドを中心とした研究論文集⁹が刊行されるまで、*Conciones* は現代の学者の注意をひいて来なかったと言える。

Conciones とは、先の引用にもあるように、古代ローマの歴史家の作品から、登場する人物の演説だけを多数抜粋し配列したものである。以下に述べる語義変遷を背景にし、本稿では、古代ローマの歴史家から抜粋された演説集成に対して、コンシオネスというジャンル名を採用することにした。*Conciones* のフランス語式発音に基づいている。抜粋の対象となる歴史家には、さまざまな組み合わせがあるが、19世紀フランスの古典中等教育で教科書として数多く使用された印刷本を標準とするならば、リーウィウス(『ローマ建国史』)を中心として、サルスティウス(『カティリーナ戦記』、『ユグルタ戦記』)、タキトゥス(『年代記』、『同時代史』)、クルティウス・ルーフス(『アレクサンドロス大王伝』)の4人が挙げられる¹⁰。

⁷ Eckard Lefèvre, Eckart Olshausen (hrsg.), *Livius, Werk und Rezeption: Festschrift für Erich Burck zum 80. Geburtstag*, München, Beck, 1983 (特に Rudolf Rieks, « Zur Wirkung des Livius vom 16. bis zum 18. Jahrhundert », pp.367-397 は時代的に対応するが *Conciones* への言及は見当たらない)。最新の次の本で少し触れられている: Pierre Assenmaker (dir.), *Tite-Live, une histoire de livres: 2000 ans après la mort du Prince des historiens latins*, Namur, Presses universitaires de Namur, 2017, pp. 178-181 (Yann Berthelet)。

⁸ Gert Ueding (hrsg.), *Historisches Wörterbuch der Rhetorik*, Tübingen, Niemeyer, 10 Bde., 1992-2012。関連するものとして項目« Feldherrnrede » (Bd. 3, col. 225-228) があるが、*Conciones* については全く触れられていない。

⁹ Juan Carlos Iglesias-Zoido and Victoria Pineda (eds.), *Anthologies of Historiographical Speeches from Antiquity to Early Modern Times: Rearranging the Tesseræe*, Leiden, Brill, « International Studies in the History of Rhetoric; 7 », 2017。

¹⁰ イグレスィアス=ソイドらの編著の巻末につけられた一覧には、1699年までの刊行物として115点が挙げられている。ただし、我々の研究対象よりも広がっていることや17世紀までしか対象となっていないという違いがある。Eidem, « Appendix. *Conciones. Printed Anthologies of Speeches (1471-1699)* », *ibid.*, pp. 401-455。

本稿は、コンシオネスのラテン語版のみを扱うが、この知られざるジャンルが近代初期ヨーロッパに生まれた状況を明らかにし、教育と関わるに到った過程を見ていきたい。

ここで検討に移る前に、*Conciones* の語源に触れておきたい。この語は、ラテン語 *contio* に遡る（複数主格 *contiones*）。この語自体、名詞 *conventio* の縮約から生じたものである（この名詞は *con-*「共に」+ *venio*「来る」つまり *convenio*「集まる」から派生）。そこから、ローマ共和政期においては、国制上の用語としての用例がまず見られる。すなわち、法律の決定、公職者の選出などのための民会 *comitia* に先立って開かれ（コンティオー召集の権限は公職者にある）、ローマ市民に法案の趣旨説明などが行われた市民集会を指すのが原義である¹¹。

さらに、ここでは、市民を説得するために演説が重要な要素となったため、この集会での演説も、換喩的に *contio* と呼ばれるようになった¹²。しかし、このような国制上に位置付けられない集会にも *contio* という語は用いられている。サルスティウス『カティリーナの陰謀』では、ローマでの陰謀が露見して正規軍に追いつめられ、捨て身の戦闘を余儀なくされたカティリーナが仲間を集めて *contio* を開きそこで演説を行なったとして¹³、歴史家はその演説を「記録」している（*Cat.* 58.1-58.21）。

中世に入り、発音の変異を受けて、*contio* は *concio* と綴られるようになる。語義も、教会・修道院関係の用法としては、修道士の集まりを意味するようになる。説教の意味にも用いられ、16世紀以後も複数形 *conciones* は印刷された説教集の題名によく見かける¹⁴。しかし16世紀、説教集とは異なる、歴史書からの演説抜粋集にも冠せられた例が現れるのである。

¹¹ *Thesaurus linguae latinae. Volumen IV*, Leipzig, Teubner, 1906-1909, col. 729-734. cf. エルンスト・マイヤー『ローマ人の国家と国家思想』鈴木一州訳、岩波書店、1978（1964）年、154頁。なお、古代史研究では現在、コンティオーに関心が寄せられ研究が相次いでいる。cf. 米本雅一「キケロの「コンティオー」と共和政末期ローマの政治文化：修辞学コンテクストのなかのコンティオー」『西洋史学』233号、2009年、20-38頁）。

¹² *Thesaurus linguae latinae. Volumen IV, op. cit.*, col. 733.37 sq.

¹³ cf. *Ibid.*, col. 730.72 (advocare). *Cat.* 57.6 を引く。

¹⁴ Albert Blaise, *Lexicon latinitatis medii aevi = Dictionnaire latin-français des auteurs du moyen-âge*, Turnhout, Brepols, « Corpus Christianorum. Continuatio Mediaevalis », 1975, p. 220; Jan Frederik Niermeyer, *Mediae Latinitatis Lexicon Minus*, 2nd Revised ed., Leiden, Brill, 2002, p. 309; René Hoven, *Lexique de la prose latine de la Renaissance*, 2e éd., Leiden, Brill, 2006, p. 116.

『ティトウス・リーウィウスのコンシオネス』

先ほどの疑問に戻り、アンリ・エティエンヌ（2世）がその評判を聞いた「ティトウス・リーウィウスのコンシオネス」とは何か。それは、1532年パリのシモン・ド・コリーヌ書店から刊行された『ティトウス・リーウィウス・パタウィーヌスのコンシオネス』¹⁵である（以後、TLPCと略す）。シモン・ド・コリーヌは、アンリ・エティエンヌ（2世）の父ロベール（1世）の義父に当たる。ロベールの母ギュイヨンヌ・ヴィアールが夫アンリ・エティエンヌ（1世）と死別した（1520年）後にシモンと結婚して、シモンはアンリ（1世）の印刷工房を引き継いだ。ロベールら子供たちが大きくなると、彼らの父の工房を譲り、自分は別な工房を経営し、1546年に死去している¹⁶。こうした事情を考慮すれば、アンリ・エティエンヌ（2世）の前記の記述も十分理解できるものになる。1531年生まれのアンリは、人文学者たちの溜まり場となっていた父ロベールの工房で、TLPCの話題を聞いていたのであろう。

コルムリーのベネディクト会士ジョアシャン・ペリオン

さて、編者のほうは、コルムリーCormery¹⁷のベネディクト会士ジョアシャン・ペリオン Joachim Périon という人物である¹⁸。ペリオンの所属したコルム

¹⁵ Joachim Périon (éd.), *Titi Livii Patavini Conciones*, Simon de Colines, 1532. 目録類では以下を参照：Philippe Renouard, *Bibliographie des éditions de Simon de Colines 1520-1546*, Mansfield Center (CT), Martino Publishing, 1999 (Réimpr. en fac-sim. de l'éd. Huard et Guillemin, 1894), pp. 199-200; ICEP4#474 [Brigitte Moreau (éd.), *Inventaire chronologique des éditions parisiennes du XVI^e siècle*, Service des travaux historiques de la Ville de Paris, puis Paris-Musées, 1972-2004, 5 vol. 以下でも ICEP と略し巻数を洋数字で付す]; Fred Schreiber, *Simon de Colines : An Annotated Catalogue of 230 Examples of his Press, 1520-1546*, Provo (UT), Friends of the Brigham Young University Library, 1995, p. 81 (#83).

¹⁶ Philippe Renouard, *Répertoire des imprimeurs parisiens, libraires, fondateurs de caractères d'imprimerie depuis l'introduction de l'Imprimerie à Paris (1470) jusqu'à la fin du seizième siècle*, Minard, 1965, p.88-89. Jeanne Veyrin-Forrer, « Introduction » in Schreiber, *op. cit.*, pp. xiii-lxxxiv.

¹⁷ アンドル=エ=ロワール県トゥール郡ブレレ小郡に属し、トゥール市内より国道 143号で東南方向に 13km ほど進みアンドル川を渡ると到着する。

¹⁸ ペリオンに関するモノグラフィーはない。以下の論文にまとまった記述があるが、伝記的事項については疑問符を付すべき箇所もある：André Stegmann, « La Place de J. Périon, bénédictin de Cormery dans l'humanisme français », in *Loches au XVI^e siècle : aspects de la vie intellectuelle, artistique et sociale : actes du colloque organisé par Les Amis du Pays Lochois et le Centre d'Études Supérieures de la Renaissance (Université*

リーのサン=ポール大修道院の歴史は古く¹⁹、トゥールのサン=マルタン大修道院院長イティエ Hitier によって 780 年に創立されたと言われている。ペリオンが修道院に入ったとき、大修道院長は、ルネ・デュ・ピユイであったが、1521 年、サン=マロ司教ドゥニ・ブリソネ Denis Briçonnet (モーの改革で知られるギヨーム・ブリソネの弟) が兼ねた。ブリソネの死後 (1535)、ペリオンは、枢機卿ジャン・デュ・ベレー (1536-1545)²⁰、ジャック・ド・ジョクール (1545-1547)、枢機卿・ランス大司教のシャルル・ド・ロレーヌ (1547-1550)、ロベール・ド・ルノンクール (1550-1557) と続く大修道院長を上長に仰いでいる²¹。

ジョアシャン・ペリオンの一族は、ブルーイ=シュル=シェーズ Preuilly-sur-Chaise (アンドル=エ=ロワール県の南端) の小貴族と言われる²²。誕生地については、このブルーイとも言われるが、コルムリーとも言われている²³。ペリオンの生年は、1498 年あるいは 1499 年頃と書かれていることが多い²⁴。1516 年 8 月 22 日コルムリーのサン=ポール大修道院で「修道士の服を着る」(修道院に入った)。1542 年 6 月 22 日にはコルムリーの礼拝堂付

François-Rabelais, Marseille, Laffitte, 1979, pp. 131-144.

- ¹⁹ Laurent-Henri Cottineau, *Répertoire topo-bibliographique des abbayes et prieurés*, T. 1, Mâcon, Protat, 1935, col. 875-876; Jean Jacques Bourassé, *Cartulaire de Cormery; précédé de l'Histoire de l'abbaye et de la ville de Cormery, d'après les chartes*, Tours, Guillaud-Verger, « Mémoires de la Société archéologique de Touraine; 12 », 1861.
- ²⁰ Rémy Scheurer, « La carrière ecclésiastique de Jean du Bellay (1498-1560) », in *Bibliothèque d'Humanisme et Renaissance*, t. 78, n° 2, 2016, pp. 265-295, surtout p. 278.
- ²¹ Bourassé, *op. cit.*, p. CXIV-CXV; Bartholomaeus Hauréau (éd.), *Gallia Christiana...*, T. 14, Farnborough, Gregg, 1970 (Réimpr. : Paris, Firmin Didot, 1856), col. 270-271.
- ²² Marie-Rose Souty, « Heurs et malheurs des de Périon, seigneurs de Ports », in *Bulletin de la Société des amis du vieux Chinon*, t. 7, n° 7, 1973, pp. 668-672. ジョアシャン・ペリオンの兄弟ジャンはブルーイのバイイをつとめ、ジャンの子アントワヌ (1523 年生まれ) は、高等法院弁護士やブルーイのバイイをつとめ、楯持ち écuyer (爵位を持たぬ小貴族の称号) を称しラ・グランジュの領主 sieur de la Grange であった。さらにアントワヌの子フィリップはル・ロジェ伯 comte du Roger と呼ばれている (Chalmel, *op. cit.*, pp. 376-377)。
- ²³ Chalmel は前者の地を、Féret (後の注 30 参照) は後者の地を誕生地としている。ブラセは、ブルーイよりも、コルムリー付近でという説に信をおき、脚注ではペリオン自身がコルムリーで生まれたことを記したと記載している (Bourassé, *op. cit.*, p. LXXXVIII et note 2)。
- ²⁴ Jean-Louis Chalmel, *Histoire de Touraine. IV, Dictionnaire biographique de tous les hommes célèbres nés dans cette province*, Marseille, Laffitte, 1981 (Réimpr. en fac-sim., Tours, Mame, 1828), pp. 374-376.

司祭 *aumônier* となる²⁵。シャルル・ド・ロレーヌが大修道院長の時代、1548年6月29日の総会以前に同修道院の副院長 *grand prieur* の地位についている²⁶。当時の大修道院長が空位聖職禄臨時保有の形態 *in commendam* をとっていたことからすると、ペリオンが実質的に修道院を管理する地位についていた。1551年自分の修道院の記録（謄本記録集 *cartulaire*）を編纂した理由もそこに求められる²⁷。ペリオンはコルムリーで1557年7月18日に死去した。ブラセはトゥール市立図書館所蔵のある写本²⁸の注記を引用する。

1557年7月18日、著名にして偉大なる記憶となる修道士ジョアシャン・ペリオン師が逝去した。その広大にして稀有の博識の故に大変惜しまれ悼まれた人物である。師は、神学博士にして国王翻訳官、当院礼拝堂付司祭であった。師は、当院内サン=ジャン礼拝堂の前に埋葬された。署名シュロー²⁹

一般にペリオンは1559年に死去とされているが、この年はペリオンの死後刊行の著作の出版年と序文から推測されたものである³⁰。しっかりした根拠のある1557年を採用すべきである³¹。

²⁵ Bourassé, *op. cit.*, p. CXX.

²⁶ Bourassé, *loc. cit.* Cf. *Gallia Christiana*, T. 14, col. 271 (LIII. Carolus I de Lorraine).

²⁷ この記録集については前掲ブラセの著書とトゥール市立図書館の写本目録（注151）を参照のこと。記録集の末尾にペリオンは自伝的記録を挿入している。ブラセの著書は記録集に集められた証書類の本文のみを翻刻し、その他の要素は収録していない。幸い、ペリオンの自伝的記録は、ブリソネ家の伝記を編纂したギー・ブルトノーの著書にフランス語に訳出の上記載されている（Guy Bretonneau, *Histoire généalogique de la maison des Briçonnet...*, J. Daumalle, 1620, pp. 230-241）。

²⁸ Tours, BM, Ms. 738 (nouvelle cote 1349). ブラセの出典では写本番号に誤記あり。

²⁹ Bourassé, *op. cit.*, p. LXXXVIII, note 1 : « Le dixhuitiesme jour de juillet ou dict an mil vc cinquante sept, descедda religieulx notable et de grande memoire frere Joachim Perion, homme fort regretté et plainct pour l'ample et singulière erudicion et sçavoir d'icelluy; il estoit docteur en theologie, interpretateur du Roy, et ausmonier de ceans. Il est inhumé en nostre monastère devant la chapelle de Monsieur sainte Jean. signé : CHEREAU. » サン=ジャン礼拝堂は、ブラセ前掲書挿入配置図（Pl. 1）によれば付属聖堂の南翼廊に設けられていたと考えられる。なお修道院の建物はごく一部のみ現存する。

³⁰ Pierre Yves Féret, *La Faculté de théologie de Paris et ses docteurs les plus célèbres. Époque moderne. T. 2, XVIe siècle : revue littéraire*, Picard, 1901, p. 328. 遺著（*De Romanorum et Graecorum magistratibus*, 1560）にある甥フランソワの献辞による推定。

³¹ Cf. Chalmel, *op. cit.*, p. 374; *Gallia Christiana*, T. 14, col. 271 (LIV. Robertus III de Lenoncourt).

さて、上記の記録にもあるように、ペリオンは、その学識によって当時名声を得ていた。最初の教育を修道院で受けた後、1527年頃先述のドゥニ・ブリソネの支援を得て³²、パリ大学で学ぶことになった³³。TLPCを刊行したのはパリ滞在の5年目のこととしており³⁴、その献辞によると当時ペリオンがモンテギュー学寮にいたことが分る³⁵。おそらく、学芸学部のカリキュラムを終え、学寮で教えながら神学を学んでいたと思われる。事実、1542年6月14日パリ大学で神学博士号を取得している³⁶。しかし、ペリオンの本領は、神学よりも、ギリシア語著作家のラテン語訳にあると考えられる³⁷。1540年にアリストテレス『ニーコマコス倫理学』のラテン語訳を刊行するなど数多くのアリストテレスの著作を翻訳している³⁸。また、ユスティヌス、オリゲネース³⁹、バシレイオス⁴⁰ら重要な教会著述家のギリシア語テキストのラテン

³² 1535年にブリソネが死去すると、その甥でサン＝マロ司教を継いだフランソワ・ボイエ Bohier が新しい庇護者となっている。

³³ Bretonneau, *op. cit.*, p. 232-234.

³⁴ *Ibid.*, p. 234.

³⁵ TLPC, f° 2a 4 r° : « Parisiis e gymnasio Montisacuti pridie Calendas Februarias. Anno M. D. XXXII, ad calculum Romanum. ».

³⁶ Féret, *op. cit.* p. 318 ; 確実な日付は以下にある。James K. Farge, *Registre des conclusions de la Faculté de théologie de l'Université de Paris. T. II, Du 26 novembre 1533 au 1er mars 1550*, Klincksieck, 1994, p. 217 (note 24).

³⁷ これら一連のラテン語訳や古典作品の校訂に附された序文は、簡単な解説とともに以下の本に集められている : Jean-François Maillard et al. (éds.), *La France des humanistes. Hellénistes I*, Turnhout, Brepols, « Europa humanistica », 1999, pp. 349-479. TLPCに付けられた献辞なども省略を含むが同書で読むことができる (pp. 352-356)。

³⁸ André Stegmann, « Les observations sur Aristote du bénédictin J. Péron », in Maurice de Gandillac et Jean-Claude Margolin (éds.), *Platon et Aristote à la Renaissance : XVI^e colloque international de Tours*, Vrin, « De Pétrarque à Descartes; 32 », 1976, pp. 377-389.

³⁹ 1556年に翻訳を刊行した『ヨブ記注解』*In totum librum Job commentarius* はオリゲネースの真作ではなく、ディーター・ハーゲドルンによれば、アレクサンドリア派のユリアヌスの著作である (Dieter Hagedorn (hrsg.), *Der Hiobkommentar des Arianers Julian*, Berlin, de Gruyter, « Patristische Texte und Studien; 14 », 1973)。マイヤールらの著作にある伝承作家一覧内の *Clavis Patrum Graecorum* への参照 (Maillard et al., *op. cit.*, p. 352) は、CPG1521ではなく、CPG2075と訂正すべきであり、つづくミーニュ神父全集への参照 (PG17, 371-522) も削除されなければならない。

⁴⁰ Iréna Backus, *Lectures humanistes de Basile de Césarée : traductions latines (1439-1618)*, Institut d'Études Augustiniennes, « Collection des Études Augustiniennes. Série Antiquité; 125 », 1990, pp. 83-95, surtout pp. 87, 91, 93, 95.

語訳も刊行した。このほか、ピエール・ラミュス（ラムス）と行った論争⁴¹やフランス語のギリシア語起源説⁴²は現在でも言及されている。

TLPC 刊行にいたる経緯

ペリオンのリーウィウスとの出会いは、まだコルムリーの修道院で学んでいた頃まで遡る。大修道院長ドゥニ・ブリソネによるリーウィウス礼讃を聞いたことが大きな転機となる。

いとも賢明なる司教様、私が記憶にとどめておりますように、私たちコルムリーの少年たちが、貴修道院の中で初歩的な学問を仕込まれていた時のこと、私たちに勧めするために、このようなことをたびたびおっしゃっておいででした、ティトゥス・リーウィウスは、ラテン語で歴史書を物したあらゆる人たちのなかで唯一、語彙の豊富さというよりもむしろ文章の荘重さや品格の点で傑出していると。そしてとくに、演説をする際の、この素晴らしい人物の全く素晴らしい能力を称讃しておられました⁴³。

こうして、この生徒は、リーウィウスに関心を抱くようになり、読むだけでなく、自ら演説を抜粋するという書くことにも進んでいった。そこにはレトリック的な視点が含まれている。

そこで、普通、読むことでいわば膨大な報償を得られることがわかっていても、書くことでならもっと多くのことを習えろと考えましたので、演説がそのために書かれることになった主題の多彩さにひかれたのは勿論、また文体自体にも感銘を受けて、私は、演説そのものを、年齢が私の熱意に許す限り、いわば狭

⁴¹ Kees Meerhoff, Jean-Claude Moisan (éds.), *Autour de Ramus : le combat*, H. Champion, « Colloques, congrès et conférences sur la Renaissance; 46 », 2005.

⁴² Colette Demaizière, « Du recours à l'histoire comme argument linguistique dans deux œuvres latines du seizième siècle », in I. D. McFarlane (ed.), *Acta conventus neo-latini Sanctandreami : Proceedings of the Fifth International Congress of Neo-Latin Studies, St Andrews, 24 Augustus to 1 September 1982*, Binghamton (NY), Center for Medieval and Early Renaissance Studies, « Medieval & Renaissance Texts & Studies; 38 », 1986, pp. 309-317.

⁴³ TLPC, f° 2a 2 r° : « Memoria teneo, prudentissime praesul, iam tum quum pueri primis adhuc literis Cormoeriaci in tuo illo coenobio institueremur, saepe hoc te cohortandi nostri causa dicere solitum, T. Livium unum ex omnibus qui latine historias scripsissent, non tam verborum copia, quam sententiarum gravitate atque dignitate plurimum praestare : in primisque laudabas divini illius viri pene divinam in concionando facultatem. »

い所に集めて、そこから何か書いたり話したりする手段を自分のために用意しようとしたのです⁴⁴。

ペリオン少年はリーウィウスの演説の抜粋を始め、すぐに夢中になったようである。そこにはリーウィウスの文体や演説の生み出される状況に応じた発想というレトリックの諸要素に魅力を感じていることが読み取れる。さらにグリソネ手摺のリーウィウスを見せてもらっている。

たまたま、並外れた賢慮を備えた人物のジャコモ・シモネッタが、狎下のきわめて豊富な蔵書の中からリーウィウスの写本を私に見せてくださいましたが、その本のいわば内臓には、当時見つけていたすべてのコンシオーの索引が、狎下の御手みずから書かれたまま隠されていたのでした⁴⁵。

ペリオンに与えた強い感銘は« viscera »という生々しい比喻にこめられている。動物を屠ったときに体内から現れる臓腑、それが多彩な血管や神経や腱などでつながっているイメージは、演説が様々な観点で分類され索引と統合された有機的な構造がグリソネによって創造されていたことを示唆している。

この手摺本との出会いがペリオン自身の抜粋作業をさらに推進したことは言うまでもない。自分の抜粋を作り上げたところで前述のように1527年頃パリ留学の機会を得た。パリでペリオンは周囲の人々に自分のまとめたような抜粋がすでに存在しているのかを聞いて回る。これほど有益と思われる物を誰かが出版してくれるだろうと期待しながら、人文学から哲学、神学への勉強を続け、余暇をリーウィウスの諸本 *exemplar* との校合や本文の注解に費やしている。しかしどこからも刊行される気配がないので、様々な懸念を振り払って刊行を決意したと述べている⁴⁶。

⁴⁴ *TLPC*, f° 2a 2 r° - v° : « Itaque quanquam alioqui legendo ampla, ut ita dicam, operae pretia mereri me posse viderem, scribendo tamen plus me consecuturum ratus, conciones ipsas, adductus videlicet argumentorum quibus scriptae sunt, varietate, atque adeo ipso genere elocutionis, quanta diligentia mea illa aetas ferebat, velut in breue coegi, ut inde rationem quandam scribendi dicendique mihi compararem. »

⁴⁵ *TLPC*, f° 2a 2 v° : « Forte velut intra viscera eius ipsius codicis Liviani, quem mihi ex bibliotheca tua locupletissima Iacobus Symoneta singulari homo prudentia exhibuerat, index quidam omnium concionum, quae tum extabant, manu tua scriptus latebat. » ジャコモ・シモネッタ (ca. 1475-1539) は、ミラーノの名家出身の法学者で、のちペーサロ司教を経て枢機卿となる (Maillard et al., *op. cit.*, p. 353, n. 7) 。

⁴⁶ *TLPC*, f° 2a 2 v° - 2a 3 r°.

コンシオネスの刊行は、最終的には、前年に同じ書店から本を出していたユベール・シュサノーHubert Sussanneau (1512-ca. 1550) の勧めに応じたい。同じ資料によれば、リーウィウスの後に、サルススティウスとクルティウス・ルーフスの歴史書からの演説抜粋を刊行する意図もあったという⁴⁷。

1532年1月31日モンテギュー学寮でドゥニ・ブリソネ宛ての献辞を序文として書き上げ、*TLPC*は刊行される⁴⁸。

TLPC の構成

パリのフランス国立図書館蔵本(請求記号 X-33476)を対象に、まず書誌的な記述を試みる(献辞や本文の引用では筆者蔵の同じ刊本を用いる)。

(標題紙)

T.LIVII PATAVINI CON- || CIONES, CVM ARGVMEN= || TIS ET ANNOTATIONI= || bus Ioachimi Perionij Benedicti= || ni Cormœriaceni. || His accessit index locupletiffimus omnium || concionum, fîmul & tabula infigniores || conciones suo quâque generi subiectas || complectens. || [marque typographique⁴⁹] || PARISIIS || Apud Simonem Colinaeum anno domini || M. D. XXXII. menfe Ianuario, || ad Calculum Romanum.

(奥付 p. 544)

PARISIIS || APVD SIMONEM COLINAEVM. || M. D. XXXII. CALCULO RO= || MANO, MENSE IANVARIO.

(紙葉構成)

2a-2b⁸, 2c⁶, a-z⁸, A-L⁸

(内容)

[#1] f^o 2a 1 r^o: 標題紙

[#2] f^o 2a 1 v^o: ブランク

[#3] f^o 2a 2 r^o - 2a 3 r^o:サン=マロ司教ドゥニ・ブリソネに宛てた献辞

⁴⁷ ベリオン訳『ユスティーンヌス全集』内「君主について」*De monarchia* フランソワ・ボイエ宛の献辞(1554年)(Maillard et al., *op. cit.*, p. 416)。

⁴⁸ 標題紙・奥付とも1532年1月。この年号は「ローマの暦法で」とされていて、注15で挙げた各書誌とも1532年としている。

⁴⁹ Tempus II. Voir Philippe Renouard, *Les Marques typographiques parisiennes des XV^e et XVII^e siècles*, Paris, H. Champion, 1926, #193; Id., *Simon de Colines, op. cit.*, p. 108; Schreiber, *op. cit.*, p. [200].

- [#4] f° 2a 3 v° - 2a 5 r° : 読者に宛てた献辞
 [#5] f° 2a 5 v° - 2b 1 v° : 演説分類表と演説分類別索引
 [#6] f° 2b 1 v° - 2b 7 v° : 演説目次
 [#7] f° 2b 8 r° - 2c 5 r° : 注解語句索引
 [#8] f° 2c 5 v° : 訂正表
 [#9] f° 2c 6 : ブランク (両面)
 [#10] f° a 1 r° - L 8 v° : 本文 (頁付けあり : pp. 1-544⁵⁰)
 [#11] f° L 8 v° : 奥付 (p. 544)

本文[#10]には、194 篇の演説 *concio* がリーウィウスの原典に登場する順番で配列されている⁵¹。この多数の演説の検索と利用のためにペリオンは本書で様々な工夫を施した。読者宛献辞[#4]でこう書いている。

というのも、まるで道標のように三重の索引でもって、町へ至る道を、不用意に道に侵入したりまた道からそれたりしないように、整備したからです。その周りには、状況説明と注解を城壁のようにめぐらせました。もし大変美しい町を手中にしたいのなら、この城壁を突破すべき (も同然と言ってよいでしょう) なのです⁵²。

ただしすべての演説に状況説明 *argumentum* と注解がそろっているわけではない。「三重の索引」とは、[#5]～[#7]の部分を目指す、本文の後に検討する。

実例：アロルクスの演説

ペリオンの本文の様子を知るために、例として「演説」90 番を取り上げる。分量的に手ごろだからである。リーウィウスの第 3 十書前半五書に含まれる第 21 巻からの抜粋である (Liv. *Ab urb.* 21.13.1-9)。第 2 次ポエニ戦争の前哨

⁵⁰ 頁付けにも誤植がある。本来、250, 254, 255 と番号を振らなければならない頁がそれぞれ 350, 354, 355 と振られている。また、p. 423 の頁付けは 42 となっている。

⁵¹ ローマ数字による原書の番号付け (以下「演説番号」とする) は数か所で番号のダブルリヤ抜けを起し、実際に番号を振った場合との齟齬がある。最後の演説は実際には 194 番目なのだが、「*concio CXIII.*」となっている (TLPC, p. 541)。

⁵² TLPC, f° 2a 5 r° : «*Nam triplici indice velut quibusdam signis viam in urbem ferentem praeparavi : in quam ne forte temere irumperes, ex eademque egredereris, circa argumenta atque annotationes velut moenia quaedam duxi, quae diruas, prope dixerim, oportet, si urbe pulcherrima potiri velis.*»

戦となったサグントゥム⁵³包囲戦に関する。ローマとカルターゴの勢力範囲のはざまにあったサグントゥムはローマの同盟者であった。ハンニバルは、この都市を攻略し、ローマを戦場へと引きずり出そうとしていた（紀元前 218 年のこととされる）。この演説に付けたペリオンの状況説明は以下のとおりである。

サグントゥム人たちの絶望の極みにあって、サグントゥム人アルコーンは、余人に知られることなく、和平を講ずる希望と計画を抱いて、アンニバルの許へと赴いた。こういう訳であるから、厳しい講和条件をアンニバルが提示すると、アルコーンはあえて帰ることもせず敵陣に留まったのである。そのときまたま、ヒスパーニア人アロルクスが、アンニバルの下で兵役についていた。なおその上に、サグントゥムの人々とは古くからの友愛の誼と歓待の誼とで結ばれていたのである。アロルクスは、アルコーンに代わって、仲介者としてサグントゥムに入り、古くからの友人たちに対して、このような言葉で講和条件を説明したのである⁵⁴。

状況説明について、ブリソネ宛献辞[#3]の中で、ペリオンは、個々の演説の理解におけるその有用性を強調していた。

というのも、演説を知るのに、それぞれの演説がどんな場所でどんな時代にどんな風にどんな機会になされたかを前もって把握し見通しておくことが大いに役立つかを知らないなどという人は誰もいないからです⁵⁵。

演説の機会などの説明は演説 90 番の状況説明で果たされている。サグントゥム人アルコー（ペリオンは *Alcon* とする）の行動に至ってはここで説明されなければ演説本文での言及を理解することができないであろう。

⁵³ 現在のスペイン、サグント。

⁵⁴ *TLPC*, p. 191 : « In summa Saguntinorum desperatione Alcon Saguntinus inconsciis caeteris ad Annibalem transiit spe atque consilio agendi de pace. Quae res in causa fuit, ut quum tristes condiciones deferret Annibal, quas certo sciebat ille caeteros non accepturos : non ausus redire, apud hostem maneret. Tum forte Alorcus Hispanus sub Annibale quidem militabat, caeterum Saguntinis veteri amicitia, atque hospitio iunctus. Is pro Alcone interpres Saguntum ingressus, veteribus amicis in hanc sententiam condiciones exposuit. »

⁵⁵ *TLPC*, f° 2a 3 v° : « Nam quis tandem nesciat plurimum ad cognitionem concionum pertinere, scientia iam ante comprehendisse atque perspexisse quo quaeque loco, tempore, modo, qua quaeque occasione habita sit ? »

こうした状況説明に続いて、アロルクスの行った演説本文が来る。ペリオンの採用したテキストに沿って訳出してみる（21巻13章1～9節、[]内は節を示す数字で、ペリオンのテキストには書かれていない）。

[1] あなたがたの市民アルコーンが、和平を求めてアンニバルの許へやってきたのだから、和平条件をアンニバルからあなたがたの許へと持ち帰っていたのならば、このような道のりは私に無用のことだったでしょう。私は、アンニバルの使いとしてでもなく、あなたがたの許へ脱走した者でもなくやって来たのですが。[2] アルコーンは、あなたがたのせいかそれとも彼自身のせいなのか、彼自身のせいというのは、もしアルコーンが心配を偽装していたならばのことですし、あなたがたのせいというのは、もしあなたがたの許に真実を持ち帰る者たちに危険があるならばのことなのですが、ともかくアルコーンは敵陣にとどまってしまったので、この私が、あなたがたご自身にとって安全と和平の条件がなくはないということを知らずじまいになるなどというようなことがないように、私と皆様の間にも古くからある友誼関係に基づいて、皆様のところにまいりました。[3] しかし、私があなたがたに話しているのはあなたがたのためですし、他の人たちのためではありません。その証拠になればよいのですが、あなたがたが自力で抵抗を続けていた間やあなたがたがローマ人からの援軍を待ち望んでいた間は、私はあなたがたに和平についてお話することはありませんでした。[4] ローマ人からの希望があなたがたになくなった後、あなたがたの武力も城壁もあなたがたを今や十分には防衛できなくなった後になってから、和平を、有利だというよりも必要だということであなたがたに私は持って来たのです。[5] ですからもんならかの和平の希望があるのです、もし和平をアンニバルが勝者としてもたらしたようにあなたがたが敗者としてそれを聞き入れるならば、もしすべてのものが勝者のものになるのですから、敗北で失うことになるものではなく、残っているものはなんであつても恵みとしてあなたがたが持つことになるならば。[6] 町のほうは、大部分破壊されほぼ完全に占領されたとみて、アンニバルはあなたがたから奪い取っていますが、農地のほうは残っています。その農地をあなたがたが新しい町を建設するような場所として割り当てることにしているのです。金と銀を、公のものも私用のものもみなすべて自分の許に差し出すようアンニバルは命じています。[7] あなたがたの身体、あなたがたの妻や子供たちの身体を不可侵のものとして保護するでしょう、もしあなたがたが武器をもたずに衣服を2着ずつもってサグントゥムから出ることを認めるならば。[8] これらのことは敵である勝者が命令するのです。これらが厳しく苛烈なものであろうと、あなたがたの運命があなたがたにそれに従うようにすすめています。あなたがたによってすべての支配権がアンニバルに与えられたときでも、何かをこれらの中からあなたがたに返還してもらえることを、確かに私が諦めているわけではありません。[9] しかしこれらのことを堪え忍ぶべきだと思います。そのほうが、あなたがた自身が虐殺されたり、あなたがた

の面前であなたがたの妻や子供たちが奪われ連れ去られたりすることを戦争の法によってあなたがたが容認することよりもはるかにましだと思うのです⁵⁶。

本文について、ペリオンが採用しているテキスト（以下 *Périor* とする）の由来について考察しておく。ペリオンのテキストとの異同を調べるため、ここではまずオクスフォード古典叢書の異文注釈を参照することにした。第3十書前半第21巻から25巻に関して、ウォルターズとコンウェイ共編の旧校訂版（以下 *OCT1* とする）⁵⁷と現在最新のブリスコー編校訂版（以下 *OCT2*、新旧が一致する場合は *OCT* とする）⁵⁸があるが、異文注釈については *OCT1* のほうが詳しいので *OCT1* を主に参照した（写本の略号も同書から）。また、1469年ローマ、スヴァインハイム=パナールツ版の原初刊本（*Roma* とする）、1520-1521年ヴェネツィア、アルド版（*Aldo* とする）、1531年バーゼル、フ

⁵⁶ *TLPC*, pp. 191-193 : « [1] Si civis vester Alcon sicuti ad pacem petendam ad Annibalem venit, ita pacis condiciones ab Annibale ad vos retulisset : supervacaneum hoc mihi fuisset iter, quo nec orator Annibalis, nec transfuga ad vos venissem. [2] Quum vero ille aut vestra, aut sua culpa manserit apud hostem, si metum simulavit, sua : vestra, si periculum est apud vos vera referentibus : ego, ne ignoraretis esse aliquas et salutis et pacis vobis condiciones, pro vetusto hospitio, quod mihi vobiscum est, ad vos veni. [3] Vestra autem causa me, nec ullius alterius, loqui quae loquor apud vos, vel ea fides sit, quod neque dum vestris viribus restitistis, neque dum auxilia a Romanis sperastis, pacis unquam apud vos mentionem feci. [4] Posteaquam nec a Romanis vobis ulla spes est, nec vestra iam aut arma vos, aut moenia satis defendunt : pacem affero ad vos magis necessariam quam aequam : [5] cuius ita aliqua spes est, si eam quemadmodum victor fert Annibal, sic vos ut victi audiat. Si non, id quod amittitur, in damno, quum omnia victoris sint : sed quicquid relinquitur, pro munere habituri estis. [6] Urbem vobis, quam magna iam ex parte dirutam, captam fere totam habet, admittit : agros relinquit, locum assignaturus in quo novum oppidum aedificetis. Aurum argentumque omne publicum et privatum ad se iubet deferri : [7] coniugum, vestraque corpora, ac liberorum vestrorum servat inviolata, si inermes cum binis vestimentis a Sagunto velitis exire. [8] Haec victor hostis imperat. Haec, quanquam sint gravia atque acerba, fortuna vestra vobis suadet. Equidem haud despero, quum omnium potestas ei a vobis facta sit, aliquid ex his vobis remissurum. [9] Sed haec patienda censeo potius, quam trucidari corpora vestra, rapi trahique ante ora vestra coniuges ac liberos belli iure sinatis. »

⁵⁷ Carolus Flamstead Walters, Robertus Seymour Conway (eds.), *Titi Livi Ab urbe condita. Tomus III, Libri XXI-XXV*, Reprinted with corrections, Oxford, Oxford University Press, « Oxford Classical Texts », 1982 (1929). 今回参照した西洋古典叢書所収の安井萌訳 (2014) はこちらの *OCT* 旧版を底本としている。

⁵⁸ John Briscoe (ed.), *Titi Livi Ab urbe condita. Tomus III, Libri XXI-XXV*, Oxford, Oxford University Press, « Oxford Classical Texts », 2016.

ローベン初版 (Froben とする) も、フランス国立図書館デジタル・コレクション「ガリカ」を通して閲覧できるので、これらとも対照した。

(読みの異同: 冒頭の数字は上記引用の節を示す)

1 **ciuis uester** : Aldo, Froben, Périon, OCT / **ciuis ipse** : Roma

1 **Alcon** : A, N, Roma, Aldo, Froben, Périon / **Alco** : C, M, D, OCT

1 **Annibalem**⁵⁹ : Roma, Aldo, Froben, Périon / **Hannibalem** : OCT

1-2 **uenissem** : C, M, D, A, N², Roma, Aldo, Froben, Périon / **uenisse** : N / **ueni**;
sed : N⁴?, Madv., OCT

2 **si** : C, M, D, A, N, Roma, Aldo, Froben, Périon / **sua si** : C2, M2, A2, OCT

2 **simulauit sua** : N⁵, Roma, Aldo, Froben, Périon / **simulauit** : C⁵(-uit in ras.), M,
D, A, N, OCT

2 **apud uos uera** : Aldo, Froben, Périon, OCT / **ad uos uerum** : Roma

2 **ego** : A^x[=A^p], Roma, Aldo, Froben, Périon, OCT / **ergo** : C, M, D, A, N

2 **aliquas et salutis** : C, M2 (siglis dubiis quibus fort. **et pacis aliquas et salutis**
uoluit; cf. c. 28.2 adn.), D, A, N, Roma, Aldo, Froben, Périon, OCT2 / **et salutis**
aliquas : M, cf. 2.41.6 et Conway, *Class. Rev.* xiv (1900), p. 357, OCT1

4 **posteaquam** : Périon / **postquam**: Roma, Aldo, Froben, OCT

4 **spes est** : Roma, Aldo, Froben, Périon / **est spes** : OCT

4 **uestra (sed uos post arma)** : A, N, Roma, Aldo, Froben, Périon / **uestra uos** : C,
M, OCT / *omnia post unquam apud uos* (§3) et *ante iam aut om.* : D

4 **ad(uel af-)fero** : C, M?, D, A, N (in M fortasse potius **refero cum r alto**) Roma,
Aldo, Froben, Périon, OCT / **defero** : M⁶

5 **uictor** : Roma, Périon / **ut uictor** : Aldo, Froben, OCT

5 **audiatis** : C, M, D, A, N Roma, Périon, OCT1 / **audietis** : Gron., bene, OCT2

5 **si non** : A dett. aliq., Roma, Aldo, Froben, Périon, OCT / **sed non** : C, M, D, A^x
[=A^p], N (**Sed non** : M, N) / **et si non** : Lov. 4 / **et non** : Weiss. (de **sed et si** cf.
5.52.12)

6 **magna iam ex parte** : Périon / **ex magna iam parte** : Roma, Aldo, Froben / **ex**
magna parte : OCT

6 **argentumque** : Roma, Aldo, Froben, Périon / **et argentum** : OCT

⁵⁹ 以下、ハンニバルの名前は様々な格形で繰り返されるが、その表記に関する写本・
版本の異同はすべて同様であるので、繰り返さない。

6 **et priuatum** : Roma, Périon / **priuatumque** : Aldo, Froben, OCT

7 **coniugum uestraque corpora** : Roma, Aldo, Froben, Périon / **corpora uestra coniugum** : OCT

7 **ab Sagunto uelitis** : Roma, Périon / **uelitis ab Sagunto** : Aldo, Froben, OCT

8 **sint** : Roma, Aldo, Froben, Périon / **sunt** : OCT

8 **ei a uobis facta** : Roma, Aldo, Froben, Périon / **ei facta** : OCT

8 **his** : M, D, A, N, Roma, Aldo, Froben, Périon, OCT / **hiis** : C

8 **uobis** : Périon / **rebus** : C, M, D, A, N, Roma, Aldo, Froben, OCT / *del.* : Woelfflin

9 **belli iure** : C, M^e, D, A, Roma, Aldo, Froben, Périon, OCT / **belli iu** : M / **belli** : N / **iure belli** : N^x

以上の箇所を照合から、Périon は、おおむね写本 A⁶⁰の読みの系統に属していることがわかる。かつてペトルルカ、ロレンツォ・ヴァッラが所有した A には彼ら自身の読みも書き留められている (2 **ego** の読みはペトルルカによる書き込みであることが判明した)。こうした輝かしい履歴をもつ A は、ルネサンス期のイタリア系写本の祖本となり、1469 年の原初刊本⁶¹もこの系統に属する。Périon は、5 か所を除き、この印刷本と一致する (これが他の演説にも当てはまるかは無論広範な検討が必要になる)。また、その内の 3 か所 (4 **posteaquam**; 6 **magna iam ex parte**; 8 **uobis**) は、調べた 3 種の印刷本とも OCT と異なる独特な読みである。それがどんな写本や印刷本の読みに支えられるのかそれともペリオン独自の読みなのか、現段階では不明である。

さらに TLPC にはテキスト伝承上注目すべき点がある。それは、1526 年ドイツのロルシュ Lorsch で発見されたばかりの写本の伝えるリーウィウスの第 5 十書前半 (41-45 巻) 本文⁶²からも演説が 13 篇抜粋されていることである。ペリオンは、読者宛献辞[#4]の中でこの新発見に触れている。

⁶⁰ Codex Agennensis (London BL Ms. Harl. 2493)、OCT1 は 13 世紀と推定、OCT2 では 12 世紀後半と推定。

⁶¹ Giovanni Andrea Bussi (ed.), [Titi Livii Historiae romanae decades I, III-IV,...], Roma, C. Sweynheym, A. Pannartz, [1469], 3 vol.

⁶² ロルシュで発見された写本は、ウィーンのオーストリア国立図書館に所蔵されており (写本番号 15)、リーウィウスの当該箇所に関して唯一の写本である。L. D. Reynolds, « Livy », in L. D. Reynolds (ed.), *Texts and Transmission: A Survey of the Latin Classics*, Oxford, Oxford University Press (Clarendon Press), 1983, p. 214.

私を取り扱っているこれらの演説自体、かの非凡なる著作家 [リーウィウス] が都市 [ローマ] の起源から自分の時代まで書き連ねた著作の残存なのです。これら以外は、時勢の不利と不正によって消失してしまいました (善良なる神々よ何という学芸の損失でしょうか)。もし学識ある人々がいわば合図で一斉にこの大義に身を捧げるといふことがありうるならば、[失われた部分も] いか沈黙から救い出されるというような希望もあるでしょう。5年前やっと、ある写本が、不完全ではありますが、ゲルマーニアで発見されました。私は、ここからもコンシオネスをそれぞれの順番で配置しました⁶³。

この写本の発見は、シモン・グリユナエウス Simon Grynaeus (Gri[e]ner) (1493-1541)⁶⁴によるものであった。そのとき、グリユナエウスは、ハイデルベルク大学に着任するにあたり、友人メランヒトンの勧めに従って、未知の写本を探索していたのであった⁶⁵。その後、曲折を経て、1531年3月にバーゼルの書肆フローベンが刊行したリーウィウス (序文はエラスムス) で、この新写本の本文は初めて活字になる (前記の照合で用いた版である)。だが、1531年7月パリの書肆ジョス・バードも、前年10月に刊行した第1～第40書 (本文の伝わらない第20書を除く) に加える形で、この第50書前半を早速刊行した⁶⁶。ペリオンが、どちらの版から抜粋したのかまだ突き止

⁶³ TLPC, f° 2a 5 v° - 2a 6 r° : « Et haec ipsa quam tractamus, reliquiae tantum sunt quaedam eorum quae ille divinus scriptor ab origine urbis in suam usque aetatem divinitus perduxit. Caetera iniquitate atque iniuria temporum interciderunt, quanto, Divi boni rei literariae damno? quae spes esset fore ut aliquando a silentio vindicarentur, si docti homines velut signo dato in hanc causam incumberent. Priore demum anno quinque libri, mutilati quidem illi, in Germania reperti sunt, ex quibus conciones suo quamque ordine disposuimus. »

⁶⁴ *Neue deutsche Biographie*, Bd. 7, Berlin, Duncker und Humblot, 1966, pp. 241-242.

⁶⁵ 写本発見について知らせる1527年9月8日付メランヒトン宛グリユナエウスの書簡は以下の書に掲載。Otto Clemen (hrsg.), *Supplementa Melanchthoniana. 6. Abteilung, Band 1, Briefwechsel 1510-1528*, Frankfurt am Main, Minerva, 1968 (Repr.: Leipzig, Heinsius, 1926), pp. 380-383; Heinz Scheible (hrsg.), *Melanchthons Briefwechsel. Bd. T3, Texte 521-858 (1527-1529)*, Stuttgart, Frommann und Holzboog, 2000, p. 155-158 (#587).

⁶⁶ バードの1530-1531年版 (ICEP4#220) はフランス国立図書館になく、アルスナール図書館に所蔵されている。請求記号 Fol-H-836 の下に1冊に仕立てられ製本されているが、丁寧に調べてみると、この第50書の部分の折丁記号 (8葉からなる) は、2A-E となって、前後の部分から独立しており、紙葉番号も、第40書までのアラビア数字ではなく、ローマ数字で I から XL までつけられている。その最後の表頁 (f° XL r°) には奥付が次のように書かれている: « FINIS || Sub prelo Ascensiano Anno MDXXXI, Mense Iulio ». さらにこの第50書の後には、いわば第3部として、グラレアヌスが作成した年表 *Chronologia* と第50書の目次が16葉にわたって印刷。この第3部で

めていない（なお、この第5十書の演説についても、その前の部分に数こそ劣るが、注解が付けられている）。

演説本文の後には、大抵の場合、本文への注が、鍵となる見出し語に分かれて登場順に並べられている。この演説90番にも8個の注が付けられている。これら8個の注のレベルや方向性は様々である。ラテン語自体の理解のためにつけられた初歩的レベルから、古代の著作の引用を含む文献学的なレベルのものまである。その上にレトリックに関する注もある。これについては、ペリオンはブリソネ宛献辞[#3]でレトリックを意識してこう説明していた。

しかし注については、もっぱら、レトリックの学習に励み心からそれに打ち込んでいる人々のためにそれらを書きました。この学習においては、文体の種類や卓越性のみならず単語の意味や性質をも注意深く識別し徹底的に知ることが大変重要なのです⁶⁷。

レトリックに関する注は索引とも関係するので後述することにし、ここでは文献学的な注を考察する。古代の様々な事象の考証においては、*TLPC* 全体を通して、ギヨーム・ビュデ（1468-1540）の名が絶えず引かれ⁶⁸、ラザール・ド・バイフ（ca. 1496-1547）の名も散見する⁶⁹。古典の著作家としては、キケロー⁷⁰とアリストテレース⁷¹がしばしば言及され、クィンティリアーナスの名も見られる⁷²。さらに、考証のために、テレンティウス・ウァッローと

は「*Sub praelo Ascensiano ad Idus Iulias anno M.D.XXX.I.*」(♯ 14^o : 年表の直後で目次の前の箇所) という日付がある。

⁶⁷ *TLPC*, ♯ 2a 3^o : « De annotationibus vero, ipsas in eorum dumtaxat gratiam scripsimus, qui studio rhetorico destinati, penitusque dediti essent : in quo plurimum habet momenti diligenter percepisse atque penitus cognosse non partes modo, sed etiam virtutes orationis, vim et naturam verborum. »

⁶⁸ 見落としがあるかもしれないが、*TLPC*, pp. 30, 34, 37, 42, 47, 54, 62, 63, 79, 104, 118, 119, 135, 151, 165, 185, 255, 277, 284, 343, 370, 381, 383, 388, 401, 413, 467, 498.

⁶⁹ *TLPC*, pp. 40, 184, 380. 『服装について』*De re vestitaria* (初版は1526年バーゼル、パリで刊行されるのは1535年から。ICEP4#1195-1197) に言及している。

⁷⁰ 5か所が弁論またはレトリック関係書への言及である。*TLPC*, pp. 62 (*Pro Archia*), 118 (*De oratore*), 165 (*Pro Cornelio*), 234 (*Topica*), 498 (*In Verrem*). 残り5か所は哲学関係。*TLPC*, pp. 13 (*De off.*), 328 (*De off.*), 334 (*De fato*), 447 (*De nat. deor.*), 520 (*De off.*).

⁷¹ *TLPC*, pp. 24, 54, 65, 215, 298, 329, 334, 388, 389 (2か所). このうち1か所 (p. 24) は『弁論術』への言及である。

⁷² *TLPC*, pp. 52, 54, 295, 298, 359.

ボンペイユス・フェストゥス、アウルス・ゲッリウスが頻繁に言及されている。

考証の模範は、ビュデの『法令彙集注解』*Annotationes in quattuor et viginti Pandectarum libros*（1508年初版、続篇の初版は1526年）あるいは『貨幣考』*De Asse et partibus eius libri quinque*（1515年初版）であろう⁷³。試しにルイー・アルベルト・サンキ編『貨幣考』校訂版（最初の3巻分のみ）の掲げる典拠作家一覧を見ると⁷⁴、ペリオンとは比べようもないほど多くの文献が挙げられている。ペリオンが利用したゲッリウス、フェストゥス、ウァッローも無論そこにある。一方、ビュデも用いたイタリアの学者たち、エルモラーオ・バルバロ、ロレンツォ・ヴァッラやアンジェロ・ポリッツィアーノらの名前はペリオンの注には見られない⁷⁵。一方、古代ローマの歴史家ルーキウス・フェネステッラの失われた作品として出回った、アンドレーア・フィオッキ（またはフィオッコ、フィレンツェ出身でエウゲニウス4世のとき教皇庁の職を得、1452年没）⁷⁶の著作『ローマ人の公職者と神官について』*De magistratibus sacerdotisque Romanorum*⁷⁷への言及がペリオンにあるが⁷⁸、ビュデはこの作品を無視している。こうした点に、あくまで1532年の時点に限られるが、古事的な考証におけるペリオンの限界が現れている。

三重の索引

本文の前におかれた索引類は、最初の、各演説の分類体系を示す一覧とこの体系にそって分類された演説の掲載頁を示す索引[#5]、2番目の、演説を掲

⁷³ ペリオンの注解でも両書名が数度明記されている（*TLPC*, pp. 62, 135, 388, 413, 498）。

⁷⁴ Guillaume Budé, *De Asse et partibus eius = L'As et ses fractions, Livres I-III*, édition critique du texte de 1541 et traduction française par Luigi-Alberto Sanchi, Genève, Droz, « Travaux d'Humanisme et Renaissance; 590 », 2018, pp. XCI-CXLVI.

⁷⁵ 管見の限り、フィリップ・ベロアルド（1453-1505）のスイーターニウス注解が1か所あるのみ（*TLPC*, p. 173）。ベロアルドの本は1520年までパリで盛んに刊行。

⁷⁶ 原初刊本は1475年頃刊行、16世紀俗語訳が出るほど普及。真の著者は1561年アントウェルペン版で明らかになる。Franco Pignatti, « Fiocchi, Andrea », in *Dizionario biografico degli Italiani*, T. 48, Roma, Istituto della Enciclopedia italiana, 1997, pp. 80-81.

⁷⁷ パリでは、1511年にボンポニオ・レートの作品集に付随させたジョス・パード編のもの（*ICEP2#193*）が最初の刊行と思われる。ペリオンのパリ修業時代には、1529年クレティアン・ヴェシエル刊（*ICEP3#1762*）、1530年シモン・ド・コリーヌ刊（*ICEP3#2090*）が出されている。

⁷⁸ *TLPC*, pp. 119, 184, 298.

載順に並べて番号と頁を示す索引（目次）[#6]、そして最後の、注解の対象となった事項の掲載頁を示す索引[#7]から構成されている。

もっとも興味深いのが最初の索引である⁷⁹。まず分類を検討する（次表）。

表：ペリオンによる演説の分類

大項目	小項目	演説数	参照
deliberatio 審議	suasio 賛成演説	20	a1
	dissuasio 反対演説	10	a2
	adhortatio 勧告	12	a3
	dehortatio 諫止	2	a4
	monitio 忠告	3	a5
	petitio 請求	8	a6
	gratiarum actio 感謝	1	a7
	commendatio 推奨	1	a8
	reconciliatio 和解	2	a9
demonstratio 演示	laus personae 人物称讃	4	b1
	laus rei 事物称讃	4	b2
	vituperium personae 人物酷評	10	b3
iudicium 裁判	accusatio sive criminatio 告訴もしくは告発	6	c1
	defensio 弁護	5	c2
	exprobratio 非難	4	c3
	invectiva 罵倒	2	c4
	expostulatio 要求	1	c5
	purgatio 潔白表明	4	c6
	querela 不平	1	c7
	obiurgatio 譴責	5	c8
	deprecatio 嘆願	2	c9

そもそもこうした分類は、アリストテレスの考え⁸⁰に従えば、それぞれの大項目において相反する2つの立場から演説が行われるので、6種類の小項

⁷⁹ TLPC, ¶ 2a 6 v^o – 2b 2 v^o.

⁸⁰ *Aristotelis Rhetorica*, 1.3 (1358a36-1358b13). 以下の訳書の注に載った表がわかりやすい。アリストテレス『弁論術』戸塚七郎訳、岩波書店（岩波文庫）、1992年、417

目で済むはずである。だが、キケロー『弁論家について』でもクインティリアーナス『弁論術教程』でも、こうした演説の種類については種々の議論があって必ずしも6分割されるわけではないことが示されている。例えば、クインティリアーナス(3.4.3)は、アリストテレスの権威も認めた上でなおもこのように疑問を呈している。

というのはもし私たちが称讃したり酷評したりすることを第3の務めに置いたとしても、次のような場合、どんな種類に関わっていると思うのでしょうか、私たちが、不平をならし、慰撫し、鎮静し、煽動し、威圧し、激励し、教訓を垂れ、曖昧な言葉を解釈し、叙述し、嘆願し、感謝し、祝辞を述べ、譴責し、中傷し、描写し、訓令し、報告し、祈願し、意見をいうような場合や他にも様々な場合に⁸¹。

この中の下線を引いた語は品詞こそ違おうがペリオンの小項目の名称(b1-b3, c7, c9, a7, c8)に通じる語彙が含まれていて、ペリオンの分類に示唆を与えた可能性がある。ルネサンス期のレトリック理論書で目にできたものは少ないが、審議の種類では、メランヒトン『レトリック基礎二書』(1531)に非常に近いものがある⁸²。そこではa1からa4, a6に相当するもの(品詞の違いがある)が言及されている。演説の種類でも、ペリオンと同様の区分が、ゲオルギウス・トラペズンティウス『レトリック五書⁸³』、メランヒトン『レトリック基礎二書⁸⁴』に見られる。

頁。また新訳の『アリストテレス全集 18. 弁論術、詩学』(岩波書店、2017年)にある「弁論術」訳者堀尾耕一による補注F(332-333頁)も分類の困難さを示す。

⁸¹ Michael Winterbottom (ed.), *M. Fabi Quintiliani Institutionis oratoriae libri duodecim. Tomus I*, Oxford, Oxford University Press, «Oxford Classical Texts», 1991 (1970), p. 136 (下線部強調は筆者) : « Nam si laudandi ac vituperandi officium in parte tertia ponimus, in quo genere versari videbimur cum querimur consolamur mitigamus concitamus terremus confirmamus praecipimus, obscure dicta interpretamur, narramus deprecamur, gratias agimus, gratulamur obiurgamus, maledicimus, describimus mandamus renuntiamus optamus opinamur, plurima alia ? »

⁸² Philipp Melancthon, *Elementorum Rhetorices libri duo*, Robert Estienne, 1534 (ICEP4#1076), p. 43 : « Genus deliberativum versatur in suadendo ac dissuadendo, in adhortando et dehortando, petendo, precando, consolando, et similibus negotiis, ubi finis est non cognitio, sed praeter cognitionem actio aliqua. » ただしバリエ初版は1532年なのでこの時点でペリオンが見たとは考えにくい。

⁸³ Luc Deitz (hrsg.), *Georgius Trapezuntius, Rhetoricorum libri quinque*, Hildesheim, Olms, «Europaea memoria. Reihe 2, Texte; 3», 2006, p. 368 (Repr. : Chrétien Wechel, 1538 :

しかし、司法的種類(裁判)では、類似の分類体系が見出せなかっただけでなく、使用された用語もレトリックの種々の辞典類や概説書⁸⁵に見られない独特のものが含まれている。『ヘレンニウス宛弁論術』では、術語として「請求」*petitio* (a6)と「潔白表明」*purgatio* (c6)が用いられている。しかし両語が体系的に結び付けられているわけではない(1.2; 1.24)。それに対して、キケロー『発想論』では「潔白表明」*purgatio* (c6)と「嘆願」*deprecatio* (c9)とが、スタシス論を構成する対概念として用いられている(1.15)。キケロー『弁論家について』には「譴責」*obiurgatio* (c8)と「推奨」*commendatio* (a8)の語が見られるが(2.12.50; 2.49.201; 3.55.211)、これらも同じ平面あるいは共通の系統で用いられた語ではない。「非難」*exprobratio* (c3)あるいは動詞「非難する」*exprobrare* はクインティリアーヌス『弁論家教程』(4.2.124; 6.2.16; 11.3.16)に用いられている。「忠告」*monitio* (a5)、「和解」*reconciliatio* (a9)、「要求」*expostulatio* (c5)は、古典的なレトリックの術語ではなく、普通に使用される語である⁸⁶。しかし「罵倒」*invectiva* (c4)は、古代末期に登場する語である。5世紀の文法学者プリスキアーヌスは、キケローの『カティリーナ弾劾』をこう呼んでいる。このように古典レトリックの代表的な作品での用例も探したが、小項目で用いられた語を包括して体系的に用いた用例は見出せなかった。

一覧の後に来る索引では、この21小項目ごとに演説を分類し、その掲載頁(あるいは演説番号)を示している⁸⁷。実は194篇すべてがこの索引に掲載されているわけではなく、ちょうど半数の97篇のみが対象となる(先の表上

ICEP5#894): « Demonstrativum est, quod attribuitur in alicuius certae personae laudem, vel vituperationem cum amplificacione. Eius partes sunt, laus et vituperatio. »

⁸⁴ Melancthon, *op. cit.*, p. 47: « Demonstrativum genus continet laudationem et vituperationem. Sed multum interest utrum personae tractentur, an facta, aut res. Aliis enim locis utendum erit in laudatione personae, aliis in laude factorum ac rerum. »

⁸⁵ Johann Christian Theophilus Ernesti, *Lexicon technologiae latinorum rhetoricae*, Hildesheim, Olms, 1962 (Repr.: Leipzig, 1797); Heinrich Lausberg, *Handbook of Literary Rhetoric: A Foundation for Literary Study*, Leiden, Brill, 1998; Josef Martin, *Antike Rhetorik: Technik und Methode*, München, Beck, « Handbuch der Altertumswissenschaft. 2. Abteilung; 3 », 1974.

⁸⁶ この3語ともキケローの語彙に使用例がある。

⁸⁷ *demonstratio* に分類された演説は演説番号で表示されている。ただし一部に掲載頁で示された演説があり(*TLPC*, f° 2a 8 v° の *Vituperium personae* の、Annibalis に書かれた数字« 188 »は演説番号ではなく掲載頁である)、索引の編集に混乱が見られる。

で合計すると 107 篇になるが重複がある)⁸⁸。例えば、先に我々が引いた演説第 90 は 191 頁から始まるのだが、この索引では見つからない。その一方、演説第 89 (188 頁、ハンノーの演説 21.10.4-15) のように複数の項目に分類されている演説もある。

この索引と演説に付けられた注はどのような関係があるのだろうか。おおむね各演説につけられた注のうち最初のもは、演説の主題、つまり案件 *causa* を解説している。演説 93 bis⁸⁹から 100 までの各注の最初のものを見てみよう (演説 96 と 99 には注がない。また演説 97 の最初の注は演説冒頭の語句を対象にしておらず、演説全体の性格を記述したものではない)。リーウィウスの原書第 21 巻の終わりから第 22 巻にかけて、アルプスを越えてイタリアに進軍したカルターゴの将軍ハンニバルが、次々とローマの指揮官たち、スキピオー、独裁官となりながらも終始慎重な戦略をとったファビウス・マクシムスとその副官ミヌキウス (ペリオンは *Minutius* と綴る)、そしてカンナエの決戦の際の指揮官パウルス・アエミリウスとテレンティウス・ウェアッローらと対峙する場面である (カッコ内に演説の主とリーウィウスの出典箇所を添える)。

[演説 93 bis (スキピオー、21.40.1-41.17)] *Si eum exercitum*) 戦いの勧告はそれ自体で充足している。同じ敵にかつて勝利した軍隊というような、案件に付随した事物で始まっている⁹⁰。

[演説 94 (ハンニバル、21.43.2-44.9)] *Si quem animum*) これもまた戦いの勧告、そこでアンニバルは、状況説明からもわかるように、兵士たちの注意を引くために、眼前で開催するように命じた見世物から語り始めている⁹¹。

⁸⁸ 演示の種類は「演説 126 番でカルターゴ・ノウアが描写されているように他 2 つの種類と結びつけられている」*« Est coniuncta cum caeteris, ut describitur Carthago nova. conc. CXXVI. »*と書かれていて、審議の種類と司法の種類演説のうち 16 篇が演示の種類と重複して分類されている。

⁸⁹ 演説番号 93 は重複してつけられているので、2 番目の方を仮に bis としておく。

⁹⁰ *TLPC*, p. 202 : *« Si eum exercitum*) Exhortatio ad bellum satis se ipsa prodit. Exorditur a re adiuncta causae, veluti ab exercitu quo eundem hostem vicerat. »

⁹¹ *TLPC*, p. 207 : *« Si quem animum*) Exhortatio item ad bellum, in qua exorditur Annibal a spectaculo quod paulo ante, ut ex argumento constat, dedita opera militum, oculis proponi iusserat. »

〔演説 95 (ミヌキウス、22.14.4-14) 〕 *Spectatumne*) これは、その躊躇によって同盟者たちが略奪の危険に遭っているといった、その人物〔指揮官ファビウス・マキシムスのこと〕を告発するやり方である。事柄自体によって単刀直入の始まりが求められている審議に關している⁹²。

〔演説 98 (ミヌキウス、22.29.8-11) 〕 *Saepe ego*) 勸告あるいは忠告、そこでは序言がヘーシオドスの金言から導かれている。ヘーシオドスの農耕詩〔『労働と日々』〕から取られた詩行〔293-297〕をアリストテレースも『ニーコマコス倫理学』第1巻〔第5節、1095b10以下〕で援用している。これらの詩行をニコロ・デッラ・ヴァッレ〔ローマの法学教授、詩人(1444-1473)〕はこのような言葉で訳している：最善の人とは、自分自身で万事を統べることができるもの〔以下略〕⁹³。

〔演説 100 (ファビウス、22.39.1-22) 〕 *Si aut collegam*)これは、勸告というよりも忠告の内容と外観を持つ。パウルス・アエミリウス〔コンスル〕が向こう見ずな同僚〔同僚コンスルのテレンティウス・ウァッローのこと〕と敵に対してどのように振る舞うべきかを忠告している。コンスルたちの気質は本当に異なるので、案件に付随する事物から始まっている⁹⁴。

さて、索引の方では、演説 93 bis と 94 が「勸告」(a3)に、演説 98 と 100 が「忠告」(a5)に(演説 100 はさらに「懇願」(c9)にも)、演説 95 が「人物酷評」(b3)と「罵倒」(c4)に分類されている。演説 93bis と 94 は、脚注での指摘と索引での分類が一致し、演説 98 と 100 も、躊躇も見られるが、一応両者は一致している。しかし、ミヌキウスの演説 95 は、演説内容を見れば、確かに「罵倒」であり、ファビウスに対する「酷評」(彼は演説 98 でそれを翻す)であるが、なぜか脚注の方では、「審議 *deliberatio* に関する」と書かれている。つまり、記号(a)の側の分類を求めているように見える。しかしその一方

⁹² *TLPC*, p. 212 : « *Spectatumne*) Ratio est criminandi eum per cuius cunctationem socii in periculo sunt ne diripiantur. Versatur in deliberatione, cuius principium abruptum a re ipsa petitur. »

⁹³ *TLPC*, p. 215 : « *Saepe ego*) Exhortatio sive monitio, in qua exordium ducitur a sententia Hesiodi. Versus ex libris Gaeorgicon Hesiodi et Aristoteles primo Ethicorum allegat, quos Nicolaus Vallensis in haec verba transtulit. Optimus is, sese qui novit cuncta magistro, [...] »

⁹⁴ *TLPC*, p. 220 : « *Si aut collegam*) Monitionis magis vim ac speciem habet, quam exhortationis. Monet quemadmodum Paulus Aemilius se gerere debeat erga collegam temerarium, atque hostes. Exorditur ab adiunctis causae, nempe moribus consulum disparibus. »

脚注は「告発するやり方」ratio criminandi とも書いていて、司法的種類(c)を思わせる。この動詞「告発する」criminator と関連する名詞「告発」crimatio は、ペリオンの演説分類の項目一覧の方では、「告訴」accusatio (c1)と同様に扱われていた（索引本体では accusatio が用いられている）。

ペリオンの分類において「酷評」(c4)と「懇願」(c9)はそもそも司法的種類に分類されていた。しかし、プリスキアーンヌスによって「酷評」演説とされていたキケローの『カティリーナ弾劾』は裁判ではなく、元老院での審議の場の演説ではなかったか。このミヌキウスの演説の 95 も 98 もどちらも戦陣で行われたものであり、裁判とは関係がない。演説 95 の直後にわざわざ「これらのことをまるでコンティオーであるかのように述べたミヌキウス⁹⁵」とまでリーウィウスは書いている。こうした弁論を分類する際に、基準の曖昧さが残っており、それが混乱を招いているように思える。

このような曖昧さは、先に述べたように古典レトリック理論自体においても払拭されていなかった。ペリオンにその責めを負わせることはできないのである。おそらくペリオンにとってはもっと実用的なレベルで分類できればよいのであって、理論的な一貫性は最初から求められていなかったのかもしれない。あるいは、われわれが検討していない当時のレトリック書に明解な分類基準が提示されているのかもしれない。今回はごく少ない演説を対象にして検討し、あわよくばペリオンの依拠するレトリック理論を突き止めようとしたのだが、結論にはいたらなかった。さらに演説の検討範囲を広げ、当時のレトリック書の一層の探索が必要となるのであろう。

TLPC のコンテキスト

モンテギュー学寮と「パリ方式」

パリ大学で学んでいる時期、ペリオンは学寮、おそらくモンテギュー学寮 collège de Montaigu⁹⁶に寄宿していたと考えるのが順当であろう。ペリオンが

⁹⁵ Liv. *Ab urb.* 22.14.15 : « Haec velut contionanti Minucio [...] ».

⁹⁶ Marcel Godet, *La Congrégation de Montaigu (1480-1580)*, H. Champion, « Bibliothèque de l'École des Hautes Études; 198 », 1912; Marie-Madeleine Compère, *Les Collèges français, 16e-18e siècles. Tome 3, Répertoire Paris*, INRP, 2002, pp. 262-274. エラスムスが 1494 年か 1495 年から 1496 年にかけてここにいたと考えられている（二宮敬編『人類の知的遺産. 第 23 巻エラスムス』講談社、1984 年、21-22 頁）。のちに、ジャン・カ

1532年にTLPCを刊行した際そこに居住していたことから、またコルムリ
ーで同じ修道院にいたピエール・デュ・ソーPierre Du Sault (Dussault)がこの
学寮の出身者でもあることから⁹⁷、その可能性は高い。この学寮は、ヤン・
スタンドンク Jan Standonck (1443-1504)⁹⁸の改革以来、厳格な規律で知られ
ただけでなく(エラスムスの諷刺で有名)、スタンドンクの後任であったノ
エル・ベダ Noël Béda (ca. 1470-1537)⁹⁹による福音主義者に対する執拗な攻
撃でも後世に悪名を残した。だが、その一方で、この学寮は、後に「パリ方
式」modus parisiensisと呼ばれるようになる教育法の揺籃の一つでもあった。
1509年(古い暦法では1508年)2月17日制定のモンテギュー学寮規則は、
パリ方式の重要な要素となる学年制を取り入れ、文法教科書の補助としてイ
タリアの人文主義者ペロッチィの名を記している¹⁰⁰。また、1520年前後には
人文学者フランソワ・デュ・ボワ(1532年以後没、Franciscus Sylviusのラテ
ン名で知られる)がこの学寮にいたことから¹⁰¹、人文主義的な教育の浸透も

ルヴァンは有料寄宿生として滞在している(E. Doumergue, *Jean Calvin : les hommes et les choses de son temps. Tome 1er, La Jeunesse de Calvin*, Genève, Slatkine, 1969 (Lausanne, 1899-1927), pp. 68-73 (Livre II, ch. I, vii); François Wendel, *Calvin et l'humanisme*, Presses universitaires de France, « Cahiers de la Revue d'histoire et de philosophie religieuses; 45 », 1976, pp. 11-19. Olivier Millet, *Calvin et la dynamique de la parole : étude de rhétorique réformée*, Genève, Slatkine, « Bibliothèque littéraire de la Renaissance. Série 3; 28 », 1992, pp. 27-34)。37歳のイグナティウス・デ・ロヨラも1528年2月5日から1529年夏までここでラテン語・人文学を初歩から学び直そうとしたが、サント=バルブ学寮に移っている(I. Rodriguez-Grahit, « Ignace de Loyola et le collège Montaigu : l'influence de Standonk sur Ignace », in *Bibliothèque d'Humanisme et Renaissance*, t. 20, 1958, pp. 388-401, surtout p. 394)。

⁹⁷ Bretonneau, *op. cit.*, p. 233; James K. Farge, *Biographical Register of Paris Doctors of Theology 1500-1536*, Toronto, Pontifical Institute of Mediaeval Studies « Subsidia mediaevalia; 10 », 1980, pp. 154-155 (#167); Bourassé, *op. cit.*, p. CXIX.

⁹⁸ 校長在職は1483年から1504年。

⁹⁹ Farge, *Biographical Register...*, *op. cit.*, pp. 31-36 (#34)。校長在職は1504年から1513年だが、1537年の死にいたるまで影響力を持っていた。ベダの後任ピエール・タンペット Pierre Tempête の在職は1513年から1528年1月29日まで。その後任ジャン・エゴン Jean Hégon は、1528年2月5日の任命で1546年の死まで在職。Godet, *op. cit.*, pp. 59-70; cf. Farge, *Biographical Register...*, *op. cit.*, p. 222 (#236)。

¹⁰⁰ Ladislaus Lukács (ed.), *Monumenta paedagogica Societatis Iesu. I. (1540-1556)*, Roma, « Monumenta historica Societatis Iesu; 92 », 1965, pp. 626-631.

¹⁰¹ Millet, *op. cit.*, pp. 31-32.

考えられる。その後デュ・ボワは、ローマの古典、とくにキケローの演説などを多数刊行している¹⁰²。

学年制は、アルプス以北のラテン語学校、とくに共同生活兄弟団と関りの深い低地地方の学校で誕生した¹⁰³。大勢の生徒にラテン語を学習させるのに効果的だったからである。またこうした学校ではいち早く印刷術が活用され印刷教材が備えられた。これも学年制の前提となる一斉授業方式を有効にした。その後、こうした学校にもイタリアから人文主義の教育理念が伝わり始める。パヴィーアとフェッラーラに学んだ人文学者ルドルフ・アグリコラ（1444-1485）がその先駆けとなった¹⁰⁴。学年制と人文主義理念が結びついた「パリ方式」の形成を考える際には、ビュデに代表されるフランス人文主義の流れだけでなく、こうした学校の出身者（スタンドンクやエラスムスもその一人）の存在も考慮しなければならない¹⁰⁵。

「パリ方式」の形成

だが、この「パリ方式」の形成過程を制度史的に検討することは非常に難しい。そこで、人文主義教育に関連した出版動向をブリジット・モローが編纂した労作『16世紀パリ出版年代順目録』¹⁰⁶から探り、人文主義的な教育の普及の様子を見ていこう。

¹⁰² Marie-Madeleine de La Garanderie, *Christianisme et lettres profanes : Essai sur l'Humanisme français (1515-1535) et sur la pensée de Guillaume Budé*, H. Champion, « Études et Essais sur la Renaissance; 9 », 1995, pp. 89-91. フランス人文主義の概観として以下を参照。Eugene F. Rice Jr., « Humanism in France », in Albert Rabil, Jr. (ed.), *Renaissance Humanism : Foundations, Forms, and Legacy. Vol. 2, Humanism beyond Italy*, Philadelphia, University of Pennsylvania Press, 1988, pp.109-122.

¹⁰³ R.R. Post, *Scholen en onderwijs in Nederland gedurende de middeleeuwen*, Utrecht, Het Spectrum, 1954; Id., *The Modern Devotion : Confrontation with Reformation and Humanism*, Leiden, Brill, « Studies in Medieval and Reformation Thought; 3 », 1968.

¹⁰⁴ Fokke Akkerman, Arie Johan Vanderjagd (eds.), *Rodolphus Agricola Phrisius (1444-1485)*, Leiden, Brill, « Brill's Studies in Intellectual History; 6 », 1988.

¹⁰⁵ Gabriel Codina Mir, *Aux sources de la pédagogie des jésuites : le « modus parisiensis »*, Roma, Institutum Historicum S. I., « Bibliotheca Instituti Historici S. I.; 28 », 1968; Marie-Madeleine Compère, *Du collègue au lycée (1500-1850) : généalogie de l'enseignement secondaire français*, Gallimard, Julliard, « Collection Archives; 96 », 1985.

¹⁰⁶ 注15参照。

ラテン語文法では¹⁰⁷、難解な韻文体で書かれたヴィルデューのアレクサンデルの教科書に、デ・スパウテル Jan De Spauter (1460/80-1520; 仏語では Despautère) の教科書が取って替わる。後者は、1509年から1511年にかけてジョス・バード書店から最初のシリーズ (*Syntaxis*, ICEP1#(1509)67; *Orthographie isagoge*, ICEP1#(1510)82; *Rudimenta*, ICEP2#73; *Ars versificatoria*, ICEP2#72; *Annotationes*, ICEP2#71) が出た。1510年代後半に入ると一挙に刊行点数が増え、1530年代前半までその傾向はほぼ維持される。

人文主義の有力な指標であるギリシア語文法を見てみよう。ギリシア文字の活字セットをパリで初めて揃えたジル・ド・グルモンの印刷所から1507年8月にフランソワ・ティサール編の *Liber gnomagryicus* が刊行されるが (ICEP1#(1507)188)、同年12月にティサールによって同じ印刷所からマヌエル・クリュソロラス『エロテマタ』が刊行されている (ICEP1#(1507)50)¹⁰⁸。これがパリで最初に印刷されたギリシア語文法書である (パリではその後も細々ながら刊行が続く)。ついでテオドロス・ガザによる文法書が、1511年頃パリでも刊行され (ICEP2#92)、1520年代後半になると増加の傾向を示す¹⁰⁹。しかし、1530年4月にルーヴェンでクレナールツ Nicolaus Cleynaerts (1493/94-1542) のギリシア語文法が登場すると、同年10月パリでも出版され (ICEP3#2037)、先行するギリシア人たちの文法書をはるかに凌ぐ人気を獲得するようになる。これは明らかに、1530年創設の王立教授団によりギリシア語講義が開講されたことと関係している¹¹⁰。

¹⁰⁷ Bernard Colombat, *La Grammaire latine en France à la Renaissance et à l'Âge classique : théories et pédagogie*, Grenoble, ELLUG, 1999.

¹⁰⁸ クリュソロラスの文法書については、Antonio Rollo, « Problemi et prospettive della ricerca su Manuele Crisolora », in Riccardo Maisano, Antonio Rollo (eds.), *Manuele Crisolora e il ritorno del greco in Occidente*, Napoli, Istituto universitario orientale, 2002, pp. 31-85; Lydia Thorn-Wickert, *Manuel Chrysoloras (CA. 1350-1415) : eine Biographie des byzantinischen Intellektuellen vor dem Hintergrund der hellenistischen Studien in der italienischen Renaissance*, Bern, Peter Lang, « Bonner romanistische Arbeiten; 92 », 2006, pp. 187-205.

¹⁰⁹ これらの他には、デメトリオス・カルココンデュラス (カルココンデュラス、カルココンデュレスとも) の文法書が1525年に刊行されている (ICEP3#791)。コンスタンティノス・ラスカリス (ca. 1434-1501) の文法書は当該期間パリで刊行されていない。ラスカリスについては、Teresa Martínez Manzano, *Constantino Láscaris, semblanza de un humanista bizantino*, Madrid, Consejo Superior de Investigaciones Científicas, « Nueva Roma; 7 », 1998, pp. 133-163.

¹¹⁰ Jean Irigoin, « L'enseignement du grec à Paris (1476-1530) : manuels et textes » in Marc

次に、人文主義の中心となるレトリック理論を見よう¹¹¹。中世において典拠とされた『ヘレンニウス宛弁論術』やキケロー『発想論』は 1506～1540 年の間も依然として継続的に刊行されている。その一方で完全な写本が 15 世紀初頭に再発見されたキケロー『弁論家について』やクインティリアヌス、さらにはアリストテレス『弁論術』についても、1520 年代後半から刊行点数の増加傾向が見られ、そこには古代レトリック理論への関心の高まりが感じられる。しかしこれらの古典的な著作に対して、新しいレトリック書への需要もあったと考えられるが、圧倒的な人気を誇れるような概説はまだ登場していない。ゲオルギウス・トラペズンティウスの『レトリック五書』は¹¹²、16 世紀に入ると、同じくアリストテレス『弁論術』ラテン語訳と同様わずかしか版を重ねていない。1520 年前後から前記のフランソワ・デュ・ボワも、レトリックの入門書¹¹³を刊行しているが重版は少ない。

そうした傾向のなかで比較的版を重ねたのが、メランヒトンの教科書である。ルターの右腕となり、宗教改革を推進した人物だが、教育の方面でも絶大な影響を及ぼしており、新しい教義に沿った大学やラテン語学校の創設や改組、教員養成、ほとんど全分野の教科書の執筆に携わった。そのメランヒ

Fumaroli (dir.), *Les Origines du Collège de France (1500-1560)*, Klincksieck, 1998, pp. 391-404; , id., « L'enseignement du grec à Paris avant 1530 » in André Tuilier (dir.), *Histoire du Collège de France. I, La Création 1530-1560*, Fayard, 2006, pp. 77-87; id., « Les lecteurs royaux pour le grec (1530-1560) », *ibid.*, pp. 233-256.

¹¹¹ 当該期のレトリック理論を概観するのに以下の文献が有用である：James J. Murphy (ed.), *Renaissance Eloquence : Studies in the Theory and Practice of Renaissance Rhetoric*, Berkeley, University of California Press, 1983; Jean-Claude Margolin, « L'apogée de la rhétorique humaniste (1500-1536) », in Marc Fumaroli (dir.), *Histoire de la rhétorique dans l'Europe moderne, 1450-1950*, Presses universitaires de France, 1999, pp. 191-257; Carl Joachim Classen, *Antike Rhetorik im Zeitalter des Humanismus*, München, Saur, « Beiträge zur Altertumskunde; 182 », 2003; Peter Mack, *A History of Renaissance Rhetoric, 1380-1620*, Oxford, Oxford University Press, « Oxford-Warburg Studies », 2011.

¹¹² John Monfasani, *George of Trebizond : a Biography and a Study of his Rhetoric and Logic*, Leiden, Brill, « Columbia Studies in the Classical Tradition; 1 », 1976; Id. (ed.), *Collectanea Trapezuntiana : Texts, Documents, and Bibliographies of George of Trebizond*, Binghamton (NY), Medieval & Renaissance Texts & Studies, 1984, pp. 459-462. 近年の研究としては Classen, *op. cit.*, pp. 137-152 (1993); Mack, *op. cit.*, pp. 39-47.

¹¹³ François Du Bois, *In artem oratoriam Progymnasmata...*, Jean de Gourmont, [1516] (ICEP2#1335); Id., *Progymnasmatum in artem oratoriam Centuria tres*, Josse Bade, 1520 (ICEP2#2318). 筆者は残念ながらどちらも未見。Cf. Millet, *op. cit.*, pp. 31-32.

トンは、レトリック教科書を3種著し、キケロー『弁論家について』を校訂しているが¹¹⁴、パリの出版者もそれらを刊行している。

また、ビザンツ世界で伝えられてきたレトリック教育の教材「ヘルモゲネース大系¹¹⁵」のうち、アプトニオスの『プロギュムナスマタ（弁論予備練習）』は、すでにアグリコラなど数人がラテン語訳を行っていた。エラスムスもまた『学習計画』で言及し有用性を認めている¹¹⁶。パリで刊行されたものとしては、1526年にリジュー学寮のベニーニュ・マルタンが編纂したジョヴァンニ・マリーア・カッターネオ訳（シモン・ド・コリーヌ刊）が最初である（ICEP3#912）¹¹⁷。こうした教材は、従来の書簡術の教本とは異なる新しい作文練習の見本となったと考えられる。

¹¹⁴ Joachim Knappe, *Philipp Melanchthons Rhetorik*, Tübingen, Niemeyer, « Rhetorik-Forschungen; 6 », 1993 (*Elementorum rhetorices libri duo* のドイツ語訳と原文を含む)。

¹¹⁵ 堀尾耕一「プロギュムナスマタ文献の伝承について」『フィロロギカ』1、2006年、1-17頁。最新の原典校訂版にはビュデ版がある（Michel Patillon (éd.), *Corpus rhetoricum*, Les Belles Lettres, « Collection des universités de France », 2008-2014, 5 tomes en 6 vol.）。「ヘルモゲネース大系」のアプトニオス以外の著作も、同時期クレティアン・ヴェシエルが出版している。これらは編者名を欠くが、ヨーハン・シュトルム（1507-1589、後にストラスブールの有名な学校を開く）の関与した可能性をモンファザーニがすでに指摘している（Monfasani, *George of Trebizond, op. cit.*, p. 325）。また、1530年前後パリにいたシュトルムの知的活動については以下の論文が興味深い：Kees Meerhoff, « Jean Sturm et l'introduction de l'humanisme du Nord à Paris (1529-1531) », in Matthieu Arnold (hrsg.), *Johannes Sturm (1507-1589) : Rhetor, Pädagogie und Diplomat*, Tübingen, Mohr Siebeck, « Spätmittelalter, Humanismus, Reformation; 46 », 2009, pp. 109-129.

¹¹⁶ *Opera omnia Desiderii Erasmi Roterodami... Ordinis primi Tomus secundus*, Amsterdam, North-Holland, 1971, p. 131。エラスムス「学習計画」月村辰雄訳、二宮敬編、前掲書、214頁。

¹¹⁷ Renouard, *Simon de Colines, op. cit.*, p. 76。アプトニオスのプロギュムナスマタについては、月村辰雄先生がその重要性を明らかにした（「プロギュムナスマタ：ある修辞学の練習問題集をめぐって」塩川徹也研究代表『レトリックとフランス文学：伝統と反逆』東京大学文学部（科学研究費による研究成果報告書、研究課題番号05450183）、1994年、5-19頁；「プロギュムナスマタの西漸」塩川徹也研究代表『規範から創造へ：レトリック教育とフランス文学』東京大学大学院人文科学研究科（科学研究費による研究成果報告書、研究課題番号06451038）、1997年、5-20頁）。さらにこうした成果に基づきイエズス会におけるプロギュムナスマタの継承に触れた研究がある（久保田静香「デカルトとプロギュムナスマタの伝統：イエズス会学校のレトリック教育を經由して」『明学仏文論叢』50号、明治学院大学文学部、2017年、1-40頁）。

そして一層注目に値するのが、キケローの演説作品が 1520 年代後半から著しく刊行点数を増加させていることである¹¹⁸。それも一本の演説が単体で刊行されたものが多い。このような刊行形態は学寮での使用を示しているのではないだろうか。キケローの演説は、前世紀ゲオルギウス・トラペズンティウスの『レトリック五書』において分析の対象になっていた¹¹⁹。1526 年刊のフランソワ・デュ・ボワ注解ミロー弁護演説の場合¹²⁰、演説にデュ・ボワの編纂したレトリック (*De arte dicendi genere judiciali compendium*) が解説のように付けられている。演説がレトリックの観点から講読されるようになったと考えられる¹²¹。さらに、キケローの演説だけでなく、リーウィウスから抜き出された演説もこうした教材の対象となったと思われる。同じ状況下で相反する立場から演説を行った例から 2 つの演説が取り出されてくるといった例が見られる¹²²。また、こちらはギリシア語だが、トゥーキューディデース『歴史』第 1 書から 12 篇の演説を抜粋したもの（编者不明）も 1531 年に刊行されており¹²³、ペリオンの『コンシオネス』との関連が注目される。

¹¹⁸ キケロー受容についての近年の研究としては以下のものがある：George A. Kennedy, « Cicero's Oratorical and Rhetorical Legacy », in James M. May (ed.), *Brill's Companion to Cicero : Oratory and Rhetoric*, Leiden, Brill, 2002, pp. 481-501. ルネサンス期に的を絞ったものとしては：John O. Ward, « Renaissance Commentators in Ciceronian Rhetoric », in James J. Murphy (ed.), *op. cit.*, pp. 126-173; James J. Murphy, *Latin Rhetoric and Education in the Middle Ages and Renaissance*, Aldershot, Ashgate, « Variorum Collected Studies; 827 », 2005 [article 16, « Ciceronian Influences in Latin Rhetorical Compendia of the 15th Century » (1988)], Joachim Classen, « Cicerostudien in der Romania im fünfzehnten und sechzehnten Jahrhundert », *op. cit.*, pp. 1-71. 以下の論文は 16 世紀前半のフランスの状況を知るには役立たなかった。Joseph S. Freedman, « Cicero in Sixteenth- and Seventeenth-Century Rhetoric Instruction », in *Rhetorica*, vol. 4, n° 3, summer 1986, pp. 227-254.

¹¹⁹ Monfasani, *George of Trebizond*, *op. cit.*, p. 290.

¹²⁰ 1526, J. Bade (ICEP3#953) ; 1528 (ICEP3#1417).

¹²¹ Classen, *op. cit.*, pp. 41-42.

¹²² Titus Livius, *Orationes adversariae M. Portij Catonis et L. Valerij de lege Oppia. Idem duae Persei atque Demetrij fratrum apud Philippium*, Chr. Wechel, 1531 (ICEP4#219). 筆者は未見。

¹²³ *Thucydides Conciones*, Chr. Wechel, 1531 (ICEP4#297). マザリーヌ図書館で閲覧。トゥーキューディデースからの演説抜粋については、ラテンの歴史家より古い伝統がある (Juan Carlos Iglesias-Zoido, « The Byzantine Influence : Heredia's *Tucidides* and the *Contiones Thucydides* of Lapo da Castiglionchio », in Iglesias-Zoido and Pineda (eds.), *op. cit.*, pp. 136-153) 。

キケローの文体とレトリックへの関心は勿論、ペトルルカ以来続いてきた。15世紀イタリアでキケローの文体の完全な模倣をめぐって論争も起きている。フランスでは、エラスムスの対話篇『キケロー主義者』（1528）が多くの人文学者たちに衝撃を与え、1531年にはJ. C. スカリジェル（1484-1558）が、さらに1535年にはエティエンヌ・ドレ（1509-1546）がエラスムスに反論している。また1536年にはペリオンの友人シュサノーはキケロー用語辞典（ICEP5#313）を刊行している。こうした反応は、1530年前後にキケローの文体を理想化するほどその受容が進んだ証拠と言える。これが10年ほどの期間で急速に進んだことは、「パリ方式」の定着と関連づけられないだろうか。

その後「パリ方式」は1598年9月3日制定のパリ大学学則に織り込まれていく。一方、パリ大学と対立するイエズス会もまた時間をかけて「パリ方式」を消化し、1599年「学事規則」*Ratio studiorum*にまとめ上げ、ヨーロッパ以外にも広げていく。ドイツ語圏では、メランヒトン¹²⁴、シュトゥルムらが「パリ方式」と同様の人文主義と「学年制」を核とした教育システムを採用する。こうした広範囲で堅固なシステムの登場は、コンシオネスというジャンルにとっても、17世紀におけるヨーロッパ規模の普及や20世紀初頭まで続く長い生命を約束するものとなったのである。

ペリオンのキケロー主義

ペリオンがパリで学び始めた1520年代後半はこのように「パリ方式」の形成期にあたる。こうしたコンテクストはペリオン自身の仕事、特に一連のギリシア語原典（特にアリストテレス）のラテン語訳に反映している。ペリオンは、逐語訳を捨て、キケロー風のラテン語を駆使してアリストテレスを翻訳した¹²⁵。1540年に刊行されたペリオン自身の翻訳論『最良の翻訳について』（ICEP5#1911）ではキケローに対する意識がはっきりと読み取れる。そこでは、キケローによるギリシア語翻訳などを例に取り上げ、ギリシア語

¹²⁴ マルティン・H・ユング『メランヒトンとその時代：ドイツの教師の生涯』菱刈晃夫訳、知泉書館、2012年、51-53頁。

¹²⁵ Charles B. Schmitt, *Aristote et la Renaissance*, Presses universitaires de France, « Épiphanie », 1992 (Traduit par Luce Giard : *Aristotle and the Renaissance*, Cambridge (MA), Harvard University Press, 1983), pp. 88-95; Glyn P. Norton, *The Ideology and Language of Translation in Renaissance France and their Humanist Antecedents*, Genève, Droz, « Travaux d'Humanisme et Renaissance; 201 », 1984, pp. 217-221.

の一単語に複数の訳語を充てることを正当化するだけでなく、訳語もキケローの語彙の範囲に限定するなど徹底したキケロー主義を主張している¹²⁶。

こうしたペリオンの翻訳は、バーゼル¹²⁷やケルンでも重版されるほど根強い人気を博し、その名声を築き上げた。歴史家パオロ・ジョヴィオ(1483-1552)が当時の著名な学者を扱った著書でペリオンについて「アリストテレースにキケローの口で話させた¹²⁸」と語るほど、その翻訳のキケローの文体は有名となった。王立教授団ヘブライ語教授ジェネブラール Gilbert Générard (1537-1597)はその『年代誌』(初版 1570年)でこうペリオンの訳業を讃えている。

1548年。ベネディクト会士でパリの神学者のジョアシャン・ペリオンが、アリストテレース哲学教程を初めてラテン語かつキケローの言葉に翻訳し、その結果これ以後哲学者たちは、それまでは舌足らずだったのだが、ラテン語で語り始め、彼らの学識や本を損なった野蛮さを忘れ始めた。昔の人々の翻訳や本が退けられて、この偉大なる恩恵は一層長く続いたのである¹²⁹。

こうした称讃の一方で、批判もあった。ギュイエンヌ学寮ギリシア語教授ニコラ・ド・グルシーNicolas de Grouchy (1509-1572)はペリオン訳を改訂し、ペリオンの反撥にもかかわらず、このグルシー改訳がその後は版を重ねることになる。またアリストテレース以外の翻訳でも、底本となる写本の問題ま

¹²⁶ 榎本武文「ジョアシャン・ペリオン『最良の翻訳法について』」『人文・自然研究』12号、一橋大学大学教育研究開発センター、2018年、4-32頁。

¹²⁷ 当地の大学教授 C. S. クリオーネや出版者オポリヌスとペリオンとの書簡の往復が確認されている (Martin Steinmann, *Johannes Oporinus : ein Basler Buchdrucker um der Mitte des 16. Jahrhunderts*, Basel, Helbing und Lichtenhahn, «Basler Beiträge zur Geschichtswissenschaft; 105», 1967; Peter G. Bietenholz, *Basle and France in the Sixteenth Century*, Genève, Droz, «Travaux d'Humanisme et Renaissance; 112», 1971, pp. 154-155, 158, 318-320)。

¹²⁸ Paolo Giovio, *Elogia virorum literis illustrium quotquot vel nostra vel avorum memoria vixere...*, Basel, Perna, 1577, p. 146 : « qui Aristotelem Ciceronis ore loquentem fecit. »

¹²⁹ Gilbertus Genebrardus, *Chronographiae libri quatuor*, Martin Le Jeune, 1580, p. 445 : « An. 1548. Ioachimus Perionius Benedictinus Theologus Parisiensis Philosophiae Aristotelicae curriculum ita Latine et Ciceroniane primus vertit, ut deinceps Philosophi Latine loqui coeperint, qui antea erant infantes, et paulatim dediscere barbariem, qua eorum disciplinae et libri erant foedati. Repudiatis veterum versionibus et formulis, hoc divinum beneficium manavit longius. »

を含めて、ペリオンの翻訳を疑問視する者も現れた¹³⁰。このようにキケロー主義は両刃の剣のように彼の名声を弱める原因にもなったのである。

終わりに：その後のコンシオネス

ペリオンの *TLPC* はこうした人文主義教育の成立過程で生み出された。3年後にはアントウェルペンの書肆で模倣され、1545年にもバーゼルのローベルト・ヴィンター書店からほぼ同じ体裁で刊行されるなど一定の支持を得た¹³¹。だが、この *TLPC* は、ペルラン先生が擁護したようなコンシオネスの形をまだ取っていない。その題名のとおりリーウィウスしか抜粋の対象にしておらず、本のサイズも教室で講読されるような本を超えているからである。その役割は、むしろ実用を志向し、読者が種々の状況でリーウィウスの演説を模範として活用できるようにすることにあつた。

こうした用途は、1570年のエティエンヌ版でも踏襲され、こちらは、フォリオ版という大きな判型に、リーウィウス¹³²だけでなく、他の古代ローマの歴史家やギリシアの歴史家の著作からも演説を集めた¹³³。

では、コンシオネスは一体いつ学校教科書となったのだろうか。その嚆矢と考えられるのが、1541年にラインハルト・ロリヒ Reinhard Lorich (1564没)¹³⁴

¹³⁰ Jacques de Billy, *Sacrarum observationum libri duo*, Guillaume Chaudière, 1585, pp. 73-74, 85-86, 93-94 (lib. 2, cap. 1, 5, 6). ビイの詳細な検討結果はイェズ会士ポッセヴィーノの文献解題 (Antonio Possevino, *Apparatus sacer. Tomus secundus*, Venezia, Societas Veneta, 1606, p. 104; 1608年版では *Tomus 5*, p. 809) にも引き継がれるが、これ以後ペリオンの訳業を詳細に検討する者は現代の専門家の登場まで途絶える。

¹³¹ *T. Livii Patauni Conciones per Ioachimum Peronium... collectae. His accessit Oratio L. Catilinae ad milites, ex C. Crispi Salustii historiis*, Antwerpen, Joh. Steelsius (typis Grapheus), 1535; *Joachimi Peronii... In omnes T. Livii conciones... annotationes; una cum ipsis T. Livii concionibus per genera causarum distinctis...*, Basel, Robert Winter, 1545. 前者は未見。

¹³² リーウィウスから、エティエンヌは、ペリオンが選択した 194 篇の演説のうち 173 篇を採用し、ペリオンの選択したもの以外はあらたに選択していない。また、状況説明もそのまま採用したと考えられる。

¹³³ M. Violeta Pérez Custodio, « Henri II Estienne's *Conciones siue orationes ex Graecis Latinisque historicis excerptae* », in Iglesias-Zoido and Pineda (eds.), *op. cit.*, pp.213-237.

¹³⁴ ロリヒはハーダマル Hadamar (ドイツ、ヘッセン州) で生まれ、1521年12月10日ケルン大学で *baccalaureus* 号取得、1527年5月30日ヴィッテンベルク大学で *bonarum artium magister* 号取得、同年、新設のマルブルク大学に着任、人文学教師となる。1548年まで同大学で教え、その間学部長や学長を務める。1548年から1554年まで

が刊行した演説集成である¹³⁵。ロリヒは、マールブルク大学で人文学を教えており、この本もその予備課程で使用することを念頭に置いている。収録範囲はリーウィウス以外のラテン語歴史家にも拡大され、サルスティウス、クルティウス、タキトゥス、カエサル、ヘーローディアヌスを収める。ロリヒの本は、ブレッシヤの書肆マルケッティ Pietro Maria Marchetti に模倣¹³⁶されるなど、カトリック圏にも反響を呼んだ。

リーウィウス、サルスティウス、クルティウス、タキトゥスの4人組の演説集に落ち着いたのは、1625年10月2日制定のホラント州教育令を端緒とする。この教育令作成には、レイデン大学の古典学者ゲルハルドゥス・ヨアンネス・ヴォシウス(1577-1649)が関与している¹³⁷。ヴォシウスは歴史記

帝国都市ヴェツラールの学校教師となる。ベルンバッハ(ヘッセン州フライゲリヒト)で死去。Franz Grundlach, *Catalogus professorum academiae Marburgensis: die akademischen Lehrer der Philipps-Universität in Marburg von 1527 bis 1910*, Marburg, «Veröffentlichungen der Historischen Kommission für Hessen und Waldeck; 15», 1927, pp. 310-311 (#537); Wolf Struck, «Zur Reformation in Nassau-Hadamar» in *Hessisches Jahrbuch für Landesgeschichte*, 11, 1961, pp. 90-135; Franz Schulten, «Magister Reinhardus Lorich-Hadamar: ein Schulmeister der Reformationszeit in Wetzlar» in *Archiv für Mittelrheinische Kirchengeschichte*, 41, 1989, pp. 61-79。プロギュムナスマタ普及に対してもロリヒの貢献は注目に値する。アグリコラ訳とカッターネオ訳をベースにしたラテン語訳に注解と豊富な作例(自作も含む)をつけて大幅に増補された版はその後西欧各国で重版された。プロギュムナスマタの通史的記述としては以下のマンフレート・クラウス執筆項目を参照。Manfred Kraus, «Progymnasmata, Gymnasmata», in, Gert Ueding (hrsg.), *op. cit.*, Bd. 7 (2005), col. 159-190。

¹³⁵ *T. Livii Patavini, lacteo eloquentiae fonte manantis, Orationes, separatim cum argumentis aeditae, in iuventutis studiosae commoditatem. Quibus accesserunt orationes omnes, quae iam extant apud C. Crispum Salustium, Q. Curtium, C. Caesarem, P. Cornelium Tacitum et Herodianum*, Marburg, Christian Egenolff, 1541。ロリヒは1537年に早くもリーウィウスの第3十書から抜粋された演説集を出している。*T. Livii Patavini Orationes omnes, ex libris de II. bello Punico, artificio dialectico et rhetorico illustratae. Ex iisdem libris miscellanea, observationes, et apophthegmata, rerum omnium memorabilium ac insignium, diligenter excerpta per Reinhardum Lorichium...*, Frankfurt am Main, Christian Egenolff, 1537。出版者のエーゲノルフは、ロリヒの同郷人で、1541年にマールブルクで上記のコンシオネスを出版している。

¹³⁶ Iglesias-Zoido and Pineda (eds.), *op. cit.*, p. 410。ロリヒ1541年版はバイエルン州立図書館で閲覧(その後pdf版も入手したがノドが一部見えない)、マルケッティ版(1600年?)はマザリーヌ図書館で閲覧。両者の状況説明文は管見のかぎり同一だが、献辞は異なる。*TLPC* と比べると、状況説明文が差し替えられている箇所がある。

¹³⁷ C. S. M. Rademaker, *Life and Work of Gerardus Joannes Vossius (1577-1649)*, Assen, Van Gorcum, «Respublica literaria Neerlandica; 5», 1981, pp. 188-206。

述における演説挿入を積極的に支持していた¹³⁸。教育令の講読書規定では、一番上に属する学年 *Classis I* の下級 *ordo inferior* (2つの *ordo* に分割) で、月、火、木、金の各曜日 9時から10時まで「キケローのミロー弁護演説もしくはサッルスティウス、リーウィウス、クルティウスの演説撰」を読むように定められている¹³⁹。ちなみに、その下の学年 *Classis II* の方では、月、火、木、金の各曜日7時から9時まで、ヴォシウスの簡約レトリックと論理学基礎が交互に教えられ、9時から10時のあいだは、キケローの演説が講読され、10時からは随時文体の練習が行われると定められ、同じ学年の水曜日と土曜日は、10時から、要録(クレイアー)などのプロギュムナスマタが行われ、その際にはアプトニオスもしくはテオーンが手本とされた¹⁴⁰。

さらに注目されるのは、この教育令に従った著作が国定版として編纂され、1626年一斉に刊行されたことである。アプトニオスの『プロギュムナスマタ』とテオーンの『プロギュムナスマタ』は、それぞれダニエル・ヘインシウスの校訂を経てレイデンの書肆エルゼフィール B. & A. Elzevier から刊行され¹⁴¹、『コンシオネス』はレイデンの書肆アンドレアス・クルック Andreas Cloeck¹⁴² から、*Conciones et orationes ex latinis historicis excerptae, argumenta singulis praefixa sunt, quae causam cujusque & summam ex rei gestae occasione explicant...* として刊行された(編者の名は書かれていない)¹⁴³。巻頭には新たに無署名の短い序文が置かれた後、エティエンヌ 1570年版から取られたヨブス・ヴェラティウス執筆の文章が付けられている。その後、本文がそれぞれの歴史家¹⁴⁴

¹³⁸ Nicholas Wickenden, *G. J. Vossius and the Humanist Concept of History*, Assen, Van Gorcum, « *Republica literaria Neerlandica*; 8 », 1993, pp. 211-212.

¹³⁹ Ernst Jan Kuiper, *De Hollandse 'Schoolordre' van 1625 : Een studie over het onderwijs op de Latijnse scholen in Nederland in de 17de en 18de eeuw*, Groningen, J.B. Wolters, 1958, pp. 18-21.

¹⁴⁰ *Ibid.*, pp. 16-19.

¹⁴¹ *Ibid.*, pp. 134-137.

¹⁴² この書肆は、1606年にヴォシウスの『弁論術教程 6巻』*Oratoriarum institutionum libri VI* をすでに刊行していた。Rademaker, *op. cit.*, p. 75.

¹⁴³ この本は稀覯本で、オーストリア国立図書館とストックホルム王立図書館でしか所蔵を確認できず、カイベルも国定版の実物を確認できないと述べるほどであった(国定版は「もう現存しない」« *niet meer aanwezig* », Kuiper, *op. cit.*, p. 121)。筆者が入手することができた本はキケロー演説撰(*M. Tulli Ciceronis orationum selectarum liber*, Leiden, Bonaventura & Abraham Elzevier, 1626)と合本されている。

¹⁴⁴ 1625年の教育令では言及されていないタキトゥスも含まれて歴史家は4人となる。また、リーウィウスからの演説は第40巻までの分が採用されている。

ごとに著書における登場順に配列され、状況説明¹⁴⁵だけが各演説の前に付けられ注解はない。本文の後には簡単な目次がついているが、これはペリオンやエティエンヌのつけた索引のような演説の目的に応じて分類されたものではなく、本文に収められた演説の配列に従って順にページ数を記した目次にすぎない。

その後 1640 年代からオランダ国内で刊行数が増加し、複数の出版者から 1626 年国定版の体裁に沿って出されるようになる（もっとも広く知られたのがエルゼヴィール書店版の『コンシオネス』である）。オランダ国外でも、イギリス、デンマークなどで、同じ組み合わせの『コンシオネス』が次々と登場する。これらの中には、タイトルページに「ホラントと西フリースラントの学校用に、同州議会議員諸賢の決議によって認証・検定された作品」と謳っている本もあり¹⁴⁶、1625 年ホラント州教育令の影響が顕著に表れている。

フランスにおけるラテン語コンシオネスの出版は、実はペリオン以後 18 世紀前半まで、一部の例外¹⁴⁷を除くと、ほとんど見られなくなる。その原因の一端はパリ大学やイエズス会のプログラムにあると考えられる。どちらもコンシオネスを明記しなかった¹⁴⁸。しかし、1721 年新しくコンシオネスが刊

¹⁴⁵ 全部を確かめていないが、リーウィウスについてはペリオンに由来するようである。

¹⁴⁶ 原語は「*Opus recognitum recensitumque in usum Scholarum Hollandiae et West-Frisiae, ex decreto Illustriss. D.D. Ordinum ejusdem Provinciae*」。オランダ国内では、1636 年アムステルダム、ヘンリクス・ラウレンティウス社版からこの文言が現れる（エルゼヴィール各社の 1649、1652、1662 年版やヤンソン社 1641、1683 年版も同じ）。国外でも、例えば 1663 年オックスフォードで刊行されたものに見える。『コンシオネス』1626 年国定版（レイデン、クルック社）では、単に「新たに認証・検定された作品」*« Opus de novo recognitum recensitumque »*となっている。ちなみに、1626 年国定版の他の作品の例を見ると、テオーン『プロギュムナスマタ』では「*In usum Scholarum Hollandiae West-Frisiaeque : Ex decreto Illustriss. D.D. Ordinum ejusdem Provinciae*」、『キケロー演説撰』*M. Tulli Ciceronis Orationum selectarum liber* では「*Editus in usum Scholarum Hollandiae & West-Frisiae : Ex decreto Illustriss. D.D. Ordinum ejusdem Provinciae.*」となっている。

¹⁴⁷ 1653 年パリ、クラモワジ書店版（パリ、サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館で閲覧）は、著作家や体裁の大枠で、オランダ国定版の系統によく似ている。

¹⁴⁸ 1598 年パリ大学学則の学芸学部講読リスト（同学部則 23 条）にリーウィウスの名はないが、1720 年の同学部則改正案で上級学年の講読リストにリーウィウスとタキトゥスの名が現れる（Charles Jourdain, *Histoire de l'Université de Paris au XVIIe et au XVIIIe siècle. Pièces justificatives*, Hachette, 1862-1866, pp. 4, 172）。1599 年イエズス会学事規則では人文学級での歴史家講読対象としてカエサル、サルスティウス、クルティウスとともにリーウィウスの名が挙げられている（Adrien Demoustier, Dominique

行され¹⁴⁹、1788年までパリ大学の標準版として版を重ねる。この版は、ユニヴェルシテ・アンペリアル体制下で1807年に復刊され、19世紀フランスにおけるコンシオネス¹⁵⁰の原型となったと考えられる。

最後に、ペリオンの庇護者ドゥニ・ブリソネはなぜリーウィウスの中の演説に着目するようになったのかという問いが残る。この謎を解く鍵の一つブリソネ手沢本の行方が気になるところである。コルムリーの大修道院はフランス大革命で廃絶し、その蔵書のうち数冊がトゥール市立図書館に入った¹⁵¹。この図書館の写本目録の868番にはリーウィウスから抜粋された演説集が記載されている(ペリオンの編纂した謄本記録集も市立図書館の所蔵となった)。17世紀制作と目録は記すが¹⁵²、ペリオンが見せられたあの手沢本の実物か、ペリオン自筆の『コンシオネス』か、あるいはそれらの写本ではないか。

しかしこの写本はもう見られない。第2次世界大戦のさなか、1940年6月20日(仏独休戦協定調印の2日前)政府機能の移されたトゥール市街はドイツ軍の焼夷弾攻撃を受けた。3日間にわたる火災の中で、旧市庁舎に置かれていたトゥール市立図書館は灰燼に帰し、868番の写本は、738番の謄本記録集とともに焼失した¹⁵³。こうして確認の機会は永遠に失われたのである¹⁵⁴。

Julia (éd.), *Ratio studiorum : Plan raisonné et institution des études dans la Compagnie de Jésus*, édition bilingue latin-français. Belin « Histoire de l'éducation », 1997, p. 174)。

¹⁴⁹ *Orationes ex Sallustii, Livii, Curtii, & Taciti historiis collectae, ad usum Scholarum Universitatis Parisiensis*, Quillau ; Coffin ; Desaint, 1721. 編者名はないが、ジャン・ウーゼ Jean Heuzet (ca. 1660-1728) に帰される。彼はリーウィウスを推奨したシャルル・ロラン Charles Rollin (1661-1741) から大いに称賛された。

¹⁵⁰ 19世紀のコンシオネスについては以下を参照。Toru Hatakeyama, *La Formation scolaire de Baudelaire*, Classiques Garnier, « Baudelaire ; 3 », 2019, pp. 280-283.

¹⁵¹ Georges Collon (éd.), *Catalogue général des manuscrits des bibliothèques publiques de France. Départements. T. 37, Tours, Vaduz, Topos*, 1979 (Paris, 1900), 1re partie, p. VIII.

¹⁵² *Ibid*, 1re partie, p. 630 : « 868 Discours extraits de Tite-Live. XVIIe siècle. Papier. 176 feuillets. 125 sur 85 millim. Demi-rel. parchemin, en mauvais état. – (Saint-Paul de Cormery. No. 1377 ancien.) »

¹⁵³ *Catalogue général des manuscrits des bibliothèques publiques de France. T. 53, Bibliothèques sinistrées de 1940 à 1944*, Bibliothèque nationale, 1962, pp. 12-13. ちなみに破壊を免れた写本の番号は pp. 9-10 に、写真や写しなどが作られていた写本の番号は pp. 45-47 にあるが、868番はそのどちらにもない。

¹⁵⁴ ドゥニ・ブリソネとコンシオネス写本についてはまた稿を改めて語ることにしたい。